

Bulletin 283

2020 春号



COLONNADE

特集：「住」について考える 第3弾『Bulletin』連動企画 特別シンポジウム
住まうということを多視点から考える —編集者と考える これからの建築とは—

連載：日本の建築界におけるSDGs／東海支部

FORUM

海外レポート／温故知新／未来へ継承したい風景／活動報告／日本版CABEを考える／わたしの愛用ツール



建築士定期講習や教育事業を通して 建築家の活動を支援する

株式会社建築資料研究社は、1969年に建築関連書籍の出版・販売会社として創業しました。1976年には建築関連の資格取得のための学校「日建学院」を開校し、現在全国に244校を展開。建築士や施工管理技士など建築関連の資格取得のための講座や、CADなどのスキルアップ講座を数多く開講しています。平成20(2008)年に建築士事務所に所属する建築士に定期講習の受講が義務付けられてからは、JIAと共同で建築士定期講習も開催しています。馬場栄一社長に、建築資料研究社のこれまでの歩みと、建築業界に対する思いをうかがいました。

住宅プラン集を発行する 出版社として創業

「日建学院」という名前の方が皆さんに知られていると思いますが、実際の会社名は株式会社建築資料研究社です。1969年に私の父が創業し、昨年創業50周年を迎えました。

父はもともと設計事務所に勤めており、お客様の要望を聞きながら住宅の設計をしていました。ちょうど1960年代後半、家をどんどんつくれという時代です。次々に図面を起こすうちに、家族構成や道路付け、面積、予算によって似たプランが生まれることに着目します。住宅のプラン集があれば打ち合わせをもっと効率的に進められると考え、一級建築士取得後に独立して、出版社建築資料研究社を設立しました。

今はインターネットで簡単に検索できますが、その当時は他の人の図面を見て参考にすることはできません。ですから、住宅のプラン集に続き、外観やキッチン、水廻りなどを特集した原図集を次々に出版しました。お客様との打ち合わせ資料として使いやすかったようで、大変好評いただきました。

資格取得のための学校 「日建学院」を設立

創業当時、建築士試験のための参考書などはなく、父自身、働きながら勉強するのに大変苦勞をしたそうです。その経験から、1973年に建築士資格を取得するための講座として、カセットテープの「建築士養成講座」を制作し



建築関連の書籍や参考書、雑誌などを発行している

販売しました。しかし、テープを聞くだけの講座では途中で諦めてしまったり、買ってもし聞いていないことが多く、あまり活用されていないことがわかりました。きちんと役に立つためには学校が必要ということで、1976年に「日本建設実務学院(現 日建学院)」を池袋駅前に開校しました。

生徒は仕事をしながら通うため、講座を休むこともあります。その人たちの補講用に講座をスタジオ収録するようになり、それが次第に確立され、今では教えるのが上手な講師によるクオリティの高い映像講義が当校の特徴になっています。現在は建築士以外にも施工管理技士や宅建など、建築に関する教育をやらせていただいています。

出版では、『住宅建築』や『コンフォルト』、『法令集』などを発行し、昨年17年ぶりに『造景』が復刊しました。

建築士定期講習の受講費を JIAの教育活動の原資に

日本建築家協会(JIA)とは、建築家の育成を目的に、2008年に共同でNPO法人建築家教育推進機構を立ち上げ、JIA監修のもと日建学院のノウハウを活かした建築士定期講習を実施しています。JIA会員または所員の方がこの講習を受講しますと、受講費の一部がJIA内の教育活動の原資に還元されます。勉強会や若手の活動など、建築家の皆さんの活動をより充実させるためにも、ぜひこのJIAと日建学院共同の定期講習をご利用ください。全国にある日建学院で受講でき、建築家会館での開催も始まっています。

当社はこれからも資格取得のサポートに加え、学生設計展の共催など、建設業界や建築の道に進む学生・若者を応援していきます。

株式会社建築資料研究社 日建学院

<https://www.ksknet.co.jp>

資格取得のための学校「日建学院」を運営。建築関連書籍の発行や、建築士定期講習も実施。建築学生向けに情報を発信するサイト「LUCHTA(ルフト)」も運営しています。

東京都豊島区池袋2-50-1 TEL:03-3986-2594(代)

■建築士定期講習についてのお問い合わせは、TEL:0120-243-229まで。

LUCHTA
LUCHE (ルフト) 建築学生のための情報サイト

CONTENTS

COLONNADE

4 特集：「住」について考える

第3弾 「Bulletin」連動企画 特別シンポジウム

住まうということが多視点から考える ー編集者と考える これからの建築とはー

パネルトーク／パネルディスカッション

登壇者 植久哲男 京都鴨川建築塾、元「住宅建築」編集長
小原 隆 日経BP総合研究所上席研究員、元「日経ホームビルダー」編集長
木藤阿由子 株式会社エクスナレッジ、「建築知識ビルダース」編集長
進行役 関本竜太 リオタデザイン

12 連載：日本の建築界におけるSDGs 第3回

『SDGs建築ガイド日本版』編集後記と展望

日本設計 岩橋祐之

14 東海支部 東海支部会報誌『ARCHITECT』発行継続を巡って(後編)

堀内建築研究所 中澤賢一

FORUM

16 海外レポート ロシア・アヴァンギャルド建築を訪ねて ール・コルビュジエ、マエカワ、サカクラのロシアー

篠田義男建築研究所 篠田義男

18 温故知新 時代を越えてつながるもの

一級建築士事務所 袴田喜夫建築設計室 袴田喜夫

19 抱負を語る JIAに入会して

磯貝地域建築設計事務所 磯貝俊行

抱負を語る 原点に帰って建築をはじめ

八板建築設計事務所 八板晋太郎

20 連載：未来へ継承したい風景 第3回

残したい地域の風景 ー中野区エリアの景観・歴史・環境遺産ー

建築環境デザイン研究所524 小西敏正

22 活動報告 建築交流部会 長崎軍艦島と熊本城の復旧見聞の旅

ニッテイ建築設計 木村 智

24 環境委員会 地域から考えるSDGs

アルキーフ／建築アトリエ 長井淳一

Atelier Bio 新井かおり

久米設計 横田 順

26 交流委員会 委員長退任挨拶 チャレンジした4年間

IAO竹田設計 河野剛陽

26 交流委員会 委員長新任挨拶 正会員と協力会員のさらなる連携を目指して

蒼設備設計 相野谷誠志

27 日本版CABEを考える

続「きた住まいるヴィレッジ」 JIA北海道支部による、行政との協働による地域住宅づくりの取り組み

照井康穂建築設計事務所 照井康穂

アトリエバンク 菅沼秀樹

エスエーデザインオフィス一級建築士事務所 小倉寛征

28 わたしの愛用ツール

Ultrackerの360度撮影用カメラ Aleta S2C／赤外線温度計、赤外線カメラ、レーザー距離計+a／3種のペン

BACKYARD

29 広報からのお知らせ 建築系学生のための情報サイト「LUCHTA」と連携しています

交流委員会のホームページが改訂されました

30 「Bulletin」編集長 退任新任挨拶／支部会報誌「Bulletin」原稿募集

31 ひといき 海と空の間で

DESIGN 空 塚本久志

31 編集後記

2 パートナーズアイ 株式会社建築資料研究社 建築士定期講習や教育事業を通して建築家の活動を支援する

公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館

Tel: 03-3408-8291(代) Fax: 03-3408-8294

<http://www.jia-kanto.org/members/>



第3弾 『Bulletin』連動企画 特別シンポジウム

住まうということが多視点から考える

編集者と考える これからの建築とは

シンポジウム

開催日 2020年1月31日(金) 18:30～20:00 建築家クラブ(JIA館1階)

登壇者 ^{うえく}植久哲男 (京都鴨川建築塾、元『住宅建築』編集長)

^{おぼら}小原 隆 (日経BP総合研究所上席研究員、元『日経ホームビルダー』編集長)

木藤阿由子 (株式会社エクスマレッジ、『建築知識ビルダーズ』編集長)

進行役 関本竜太 (建築家、リオタデザイン主宰、JIA関東甲信越支部広報委員)

主催 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 広報委員会

はじめに

公益社団法人 日本建築家協会(JIA) 関東甲信越支部の広報誌である『Bulletin』は、現在、特集や連載など、オリジナルの記事を中心に構成した冊子づくりを目指しています。さらに、今年度から特集に関して年間テーマを設け、数号にわたり通して楽しんでいただけるかたちを検討しています。

今年度は、建築の根源的なテーマである「住」にスポットを当て、建築家の取り組み、社会的な風潮、第三者的な視点などの観点から、「住」について改めて考えてみたいと思っています。秋号(281号)では家づくりのはじまりかたを探る「建築ウォームアップ」、冬号(282号)では場所性、地域性を主軸に多様化する設計活動や住まいかたを「都市と地域、住まいかたの多様性」と題して取り上げてきました。

今号：「住まうということが多視点から考える」について

第3弾である今号は、住まいや建築を第三者的視点から見ておられる建築専門誌の編集者の方々に集まっただき、シンポジウムを行いました。建築分野や建築家がどのように見えているのか、どのようなご意見をお持ちなのか。また、これからの住まいや建築、建築家のありかたについて、クロストークを交えて掘り下げました。

ご登壇いただいたのは、元『住宅建築』編集長の植久哲男さん、元『日経ホームビルダー』編集長の小原隆さん、『建築知識ビルダーズ』編集長の木藤阿由子さんの3名です。進行役は、関東甲信越支部広報委員の関本竜太さん。この4名のクロストークを通して、建築、建築家、住宅はどのような局面を迎えているのか考える機会になればと思います。
(『Bulletin』編集長 長澤徹)



関本 本日進行役を務めさせていただきますリオタデザイン
の関本と申します。よろしくお願いいたします。
今日はまず3名のパネラーの方に自己紹介を兼ねたパ
ネルトークをしていただき、日常のお仕事や活動で感
じておられる問題意識をご発言いただいて、その後
それを踏まえてクロストークを行いたいと思います。
では植久さんからお願いいたします。

パネルトーク

建築・私の想い

植久哲男（京都鴨川建築塾／元『住宅建築』編集長）

植久と申します。鹿島出版会で『SD』を担当した後、
建築思潮研究所に移り『住宅建築』の創刊時から編集に
携わってきました。退社後、今は京都鴨川建築塾や多摩
川建築塾などいろいろなところで勉強会を開いています。

『住宅建築』が創刊したのは1975年です。その当時、
木造軸組住宅の構法として、渡り^{あご}腮^{だい}構法（1978年）や大
文^{ふみ}さん（大工棟梁の田中文男さん）と現代計画が提案し
た民家型構法（1983年）の家が提案され、それを見て、
やっぱり木造はいいなと感激しました。なぜ感激したか
というと、『住宅建築』では作品を掲載する時、必ず矩計
図を載せていて、その当時はまだCADはありませんの
で、設計事務所から青図を借りてきてトレースしなけ
ればなりません。しかし、その青図のインキキなこと！
実際大工は怒っていました。でも民家型構法の
矩計図を見ると、相当整理されたシステムになっていて、
私はそれに感激したのです。これで木造に嵌まった。

1995年に阪神・淡路大震災が起きました。7,000人近
い方が亡くなりましたが、その大半が、家の倒壊や家具の転倒など
自宅で亡くなっているのです。当時の新聞には、「木造は地震に弱
い」という記事が出たりもしました。私は、「ふざけるんじゃない、



植久哲男氏

弱いんじゃないくて設計が悪いかつくり方が悪いのだ！あ
とは古かったり相当傷んでいるからだ。そういう家が倒
壊したのであって木造建築そのものが悪いのではない」
と書いていたのですが、それを証明できないのです。ちょ
うどその頃、山辺豊彦さんや丹呉明恭さんと一緒に大工
塾というものを始めようとしていたので、1996年から木
軸の性能を力学的に確認するために実験を始めていまし
た。みんな美意識や勘など、根拠のないもので判断して
いましたから、やはりきちんと説明できる技術が必要だ
と思ったのです。しかしその実験の成果がまとまってい
く一方で、建築界はポストモダンの風が吹いていたので
建築家も自己表現がとても強くて、この家で住む人の生
活意識にも違和感がありました。そのようなことで悶々
としていて、今でもずっとそんなふうに思っています。

最近読んだ松村秀一さんの本に、N. J. ハブラーケン
が「建築家は表現をやめて庭師を目指しなさい。庭師は、
樹木そのものはつくれませんが、樹がよく育つ環境を整え
ることはできる。建築家も同じように生活と住まいがよく
育つ環境を整えることはできる」というようなことを
言っていると書いてありました。やはり住んでいる人が
大事で、住まい方や工夫と知恵を、建築家が協力して協
働に徹すれば、多様でより自身の生活スタイルが得られ、
気持ちのよい家ができるというのでしょうか。

もうひとつ不安なことがあります。大工が年々減つて
いて、さらに高齢化が進んでいるということです。大
工は建築家の味方で、一緒にやっていかななくてはなら
ない存在です。そうでなければ他のメーカーなどに負けて
しまいますし、建築家の能力を発揮するためにも大工が
必要です。

大工不足によって、大工1人当たりの効率を2000年
を1とした場合に、2030年には1.4倍に上げなくてはなら
ないという調査結果もあるそうです。1.4倍に上げる
というのはどういうことか、どんな仕事が大工さんに残
されているのか。このあたりも考えてみると未恐ろしく
感じます。これを説明しはじめると長くなりますが、建
築家と職人は一緒にやっていく方法をどうにか考え出し
てほしいなと思います。

建築家は省エネ住宅とどう向き合うか

小原 隆 (日経BP総合研究所 首席研究員/元『日経ホームビルダー』編集長)

日経BPの小原と申します。『日経ホームビルダー』という住宅雑誌の編集長をしていました。『日経アーキテクチュア』という建築雑誌にも携わっていました。私からは省エネについてお伝えしたいと思います。

昨年5月に改正建築物省エネ法が公布されました。改正されるのは大きく3つあって、1つ目はトップランナー制度の拡充。2つ目は省エネ基準適合が義務付けられる対象が延べ面積300㎡以上になる。3つ目は建築士から建築主への説明義務が始まるというものです。この2つ目と3つ目については施行が来年の4月ですので、今から準備をされている方も多いと思います。

説明義務制度は、簡単に言うと省エネ基準に適合しているかどうかをきちんと計算して、建築士はそれを建築主に説明するというものです。その前提として、今年すべての新築に省エネ基準の適合が義務化される予定だったのですが、それは見送りになりました。どうしてかという、中小工務店も建築士(設計事務所)も、その半数が一次エネルギー消費量や外皮性能を計算できていないという調査結果が出ているからです。5割くらいしかできていないのに、ここで義務化してしまったら建てる時に混乱をきたし、建築確認が止まってしまうことを国交省は恐れたのです。ですから300㎡未満の小規模なものについては見送ることになり、300㎡以上の非住宅建築が省エネ適判の対象になりました。

建築家など住宅生産者に「施主は省エネ住宅のメリットを十分に理解していると感じるか」と尋ねた調査結果を見ると、「大部分の施主は理解していない」という回答が4割。一方、建て主側は省エネは不要だと思っ



小原 隆氏

かという、「検討したい」という方が6割以上、「建築士から具体的な提案があれば検討したい」という方が3割、合わせると9割近い方が省エネ住宅を検討したいと思っ

ている。エネは当たり前に行っているはずということの前提の裏返しなのかなと思います。それに対して、プロ側の意識があまりに低いのではないのでしょうか。

実際、建て主はこのように思っているのではないのでしょうか。「この家は寒くありませんか?」、「乾燥はしませんか?」、「カビは生えませんか?」、「光熱費はいくらくらいでしょうか?」。こういうことはデザイン以前に思っていることかもしれません。それに対して建築家はどうか。例えば、「Low-E複層ガラスを入れているから大丈夫です」、「庇があるから問題ないです」、「窓を開ければ風が通ります」、「結露するのは仕方ありません」、「光熱費は住んでみなければ分かりません」。実際こういう説明をする方もいらっしゃるのではないのでしょうか。そう言われると建て主は「本当にそうなのかな」と考えてしまう。でも心の中ではもっときちんとした説明がほしいと思っ

ているように感じます。説明にはエビデンスがないと納得できない人は多いと思います。UA値やηA値、一次エネルギー消費量を計算しないで客観的に説明できるのか。これをきちんと説明できればお客様にも納得していただけるし、申請関係の書類を書く時も何の問題もなくできると思います。

これからの建築は、新築はすべて省エネ基準に適合することが大前提になります。既存については不適合の場合がまだまだあると思いますが、適合するために省エネの性能向上のリフォームをしていく必要があるでしょう。こういった中で、建築家はこれからどういうスタンスで省エネに向き合っていけばよいのでしょうか。

ゼネコンや工務店の事業所数は、2004年から2014年の10年間でほぼ半減しています。一方、設計事務所はほとんど潰れていません。従業者数も少し減っているくらいです。これが今後どうなるのか。近年異常気候が続いています。そういった気候変動の中で、非常事態宣言を国や自治体が出していますが、これは建築家にまったく関係のない話ではありません。早稲田大学の田辺新一教授からお借りした資料には、アメリカの建築家協会(AIA)でも気候変動に対して宣言を出しています。そのひとつに、「建築家の日々の慣行を変革して、ゼロカーボン、公平、レジリエンスで健康な建築環

境を実現する」とあります。日々の設計行為の中で省エネを考えて、気候変動にできるだけ適応するような建築をつくっていく。そういうことを建築家自ら考えていかななくてはならないということで、AIAはこのような行動規範をつくっています。日本の建築家の皆さんにも考えていただきたいと思います。

この10年で工務店の設計力が上がった

木藤阿由子（『建築知識ビルダーズ』編集長）

エクスナレッジの『建築知識ビルダーズ』の編集長をしております木藤と申します。『建築知識』は知ってるけれど、『建築知識ビルダーズ』って何？という方が多いと思いますので、まずは自己紹介させていただきます。簡単に私のプロフィールを申し上げますと、1975年静岡生まれ、大学は教育学部で建築とは無関係の学生時代を過ごしました。卒業後は旅行会社に就職し、そこで旅行業界誌と出会い、B to B、つまり企業に向けて情報を発信していく面白さを経験しました。『建築知識』を知り転職したのは27歳の時でしたが、建築についてまったく知識がない状態でしたから、とても苦労しました。

たとえば、有名な構造設計の先生に取材した時に、「君は何学部だ？」と聞かれ「教育学部です」と答えると、「建築科を出ていないやつがなんで来るんだ」と洗礼を受けました。ただ、その先生は私を門前払いするのではなく5時間ほど構造について講義してくれました。また、建築家の自邸に行けば、「見て、タイルの目地が揃っているでしょ」と言われ、私としては、目地が揃っているからどうなんだろう？「見て、床とデッキが面一になっているでしょ」と言われて、段差があると何でだめなんだろう？と理解できない。そんな日々が続く、『建築知識』にいた7年間は建築家の気持ちが分からない落ちこぼれ編集者として扱われていました。



木藤阿由子氏

そんな時に、いわゆる『建築知識』は読んでいないけれど住宅業界に関わっている工務店に向けて雑誌をつくることになり、私はその編集長を任せられました。それが『建築知識ビルダーズ』です。2010年に立ち上げましたから、ちょうど今から10年前になります。そこから年間100軒前後、主に工務店の住宅を取材しています。

創刊前、いろいろな工務店に、「新しい雑誌を立ち上げますが、どんな雑誌なら買いますか？」と聞いてみました。すると、「利益、儲かる、成約、売上、集客」この言葉が入っていれば買うよと言うのです。建築家とはすいぶん空気が違うな、そう感じながら創刊した雑誌です。ちなみに「集客」と載せたら買うと言われて、その通り表紙に「集客」と載せた号は全然売れませんでした（笑）。

もっとも売れたのは、「伊礼智の住宅設計」を特集した号でした。普段の1.5倍くらいの売上部数で、珍しく増刷をかけたほどです。そこで私は思いました。工務店にも設計を学びたい人はたくさんいるんだ、そうであれば、工務店の設計力が上がるような雑誌をつくらうと、そんな視点で工務店の家を記事にするようになって、建築家の家で見た「目地が揃っている」ことや「面一になっている」ことの意味が分かるようになりました。プランの立て方や、立面や断面の検討、きれいな納め方など、住宅を魅力的にするための設計手法は、工務店の特に若い読者に響きました。

今年で創刊10年を迎えますが、当時と比べて工務店の設計レベルははるかに上がったと思います。全国に設計も施工も経営（ビジネス）にも優れたスーパー工務店が現れ、それに触発されたほかの工務店経営者が自社の設計力の向上に力を入れるようになり、設計事務所と協業してモデルハウスをつくる工務店も出てきました。

各地域には、年間10棟前後の小さな工務店もあれば、50棟、100棟の工務店もあります。彼らが切磋琢磨してよい家をつくれれば、その地域の住宅に対する価値観を変えることができます。美しさのカケラもない今の日本の住宅街の風景を変えることができるかもしれない。私はそこに可能性を感じて、『建築知識ビルダーズ』をつくっています。

パネルディスカッション

関本 それではパネルディスカッションに入りたいと思います。植久さん、小原さん、木藤さんを今回キャストイングさせていただいたのは、当協会は専門で設計をする建築家の団体ですから設計施工会社の人はスーパーゼネコンでも入ることができません。もちろん工務店の経営者も入ることができない。そんな設計専門の純粋な建築家だけが集まる協会なのですが、このままで良いのかという危機感も正直あります。

『Bulletin』では281号(2019年秋号)から3号にわたり特集として「住まい」について掘り下げています。建築家が建築家の目線で住まいを語るとどうしても建築論に陥ってしまいます。それをもう少し外側の目線から建築家の痛いところをあぶり出したいただこうというのが趣旨ですので、遠慮なく発言していただきたいと思います。



進行：関本竜太(広報委員)

関本 木藤さんの『建築知識ビルダーズ』では「日本エコハウス大賞」というコンテストをやられています。工務店と設計事務所の意識の温度差のようなものを感じることはありますか。

木藤 工務店もさまざまですので一概に言えませんが、工務店だろうが設計事務所だろうが、性能をきちんと理解せずに「自分はできている」と思い込んでいるプロが、最もやっかいだと思っています。

関本 意識の高い工務店は性能値が売りになっているけれど、実際空間としてはどうなのか。逆に彼らに言わせると建築家の住宅は性能には無関心じゃないかと。その2択の問題でもないような気がします…。

木藤 ユーザー目線で言えば、性能が高いからダサくていい、デザインがよいから性能は低くていいという人はいないでしょう。性能も意匠もどつちもちゃんとやってほしいと思います。性能派と意匠派で対立している場合ではないのです。私が日本エコハウス大賞を立ち上げたのは、そうした現状が嫌になったからです。性能派の審査員と意匠派の審査員の両者が認める住宅を、最も優れた住宅として表彰したのです。

植久 私は木造が大好きで、プロポーションが大事だよ、もっと架構の話をしようよ、なんてことをずっとやってきましたから、高気密高断熱など性能を売りにしている住宅を見ると、なんか面白みがないというか、もう少し頑張ってもらいたいなと思ってしまいます。

それから技術というものはいろいろありまして、大工や建築家が持っているつくる技術、それから補修をする技術、あと捨てる技術の3つで完結します。というのも、地球環境のことを考えて省エネ住宅をつくることは否定はできませんし、やはりそうしなくてはいけないと思っていますが、環境に負荷がなく安全に捨てるころまで考えながら材料や工法を選択してほしいと思っています。

関本 性能問題を考えた時、我々建築家は、環境を断熱の数値だけで見るのは狭義であって、もう少し広く社会に開いたり、環境を含めて整えたりするところがあります。逆にいうとそれが隠れ蓑になっているのかもしれないね。

木藤 断熱＝数値という考え方がそもそも違うのではないのでしょうか。その印象を変えないと建築家は一生断熱をやらないのではないかと思います。なぜ断熱するかを考えれば取り組む理由は十分分かります。

住まいの環境問題を考える

住まいの性能と設計者の意識

関本 まず小原さん、環境についての問題意識をもう一度お話しただいてもよろしいでしょうか。

小原 実際設計事務所で省エネ計算をどのくらいしているのか。私が担当する取材記事では必ず性能値をスペックとして記載するようにしているのですが、そうすると取材できる建築家が限られてしまいます。そしてその対象者が増えていかない。そういう状況から、省エネ計算をするということは建築家にとって難しいことなのかなと思っています。しかし来年4月になれば、施主に説明しなくてはならなくなります。計算していませんとは言えなくなるのです。でもそこに抜け道があって、施主に「省エネ性能に関する説明は要りませんよ」と一筆書いてもらえば説明しなくてもいいのです。しかしそういうところに逃げるのではなく、建物のスペックの説明は設計者がやらなくてはならないことだと思います。自分でできなければ計算は外注すればいいのです。そこは徐々にチェンジしていかなければならないと思っています。



パネルディスカッションの様子。
左から、植久哲男氏、小原隆氏、
木藤阿由子氏。

住まいの作り手問題を考える

職人不足・工務店との協働

関本 植久さんの最初のお話にもありましたが、職人不足は皆さん肌で感じていると思います。だからこそ工務店と協働するなど、新しい関係を結ぶ時期がきているのかなと思っています。

植久さんは建築家と工務店や職人の協働についてどうお考えですか。

植久 切っても切れない仲なのに、なぜ今まで仲が悪かったのでしょうか。工務店とひとり親方ではまた違いますし、そのへんを理解してお付き合い願いたいのです。ただ、最初からチームとして考えてほしいとも思いますが、いまだに建築家に不信感のある大工は「何しろ、早いのは逃げ足だけだからなあ」と冗談交じりに言いますね。

関本 木藤さんにうかがいたいのですが、職人不足問題もそうですが、設計良し、施工良し、経営良しという工務店が地方に増えている印象があります。そういうものが生まれてきた背景や思うところがあればお聞かせいただけますか。

木藤 全国にスーパー工務店が台頭してきたのは、団塊ジュニア以降の若い経営者たちがハウスメーカーや競合他社と差別化するために「設計力」を重視したことが大きいと思います。彼らは、建築家の設計手法を学び、そこに施工性やコストを考慮して自分たちのものにしました。最近では、設計事務所のように施工エリア以外の住宅の設計を請け負う工務店も出てきています。

自社で設計力をもたなくても、積極的に建築家とコラボレーションしようと考えている工務店も少なくありません。彼らの親世代は、設計事務所の仕事＝儲からない、手間がかかる、痛いめに合うという強いアレルギーをもちますが、若い世代は設計事務所との仕事を学び

の場ととらえ、一種の自己投資と考えています。裏を返せば、単なる施工の下請けはやらないため、自分たちが学べて、うまく協業できる設計事務所を選んでいきますね。作品性も大事ですが、ある程度、ビジネス感覚をもっていることも条件にあるようです。

一方で、地方には昔ながらの大工工務店がまだまだあって、彼らもまたデザインが上手くないばかりに存在感を失いつつあります。こういう大工工務店と町の設計事務所がタッグを組んだらよいのと思います。また、高性能住宅はつくれるけど、デザインが上手くない工務店も、性能に理解のある設計事務所とコラボしたがつています。性能も意匠も高いレベルが求められる昨今、お互いの強みを生かしあえる協業相手を見つけることが急務といえるでしょう。これからは、^{コラボ}協業上手が生き残る時代だと思っています。

関本 設計事務所嫌いの工務店があるというのは非常に耳の痛い話です。小原さんも工務店と付き合う中で最近聞かれる話や感じることはありますか。

小原 相見積もりを取らない設計者は増えています。職人が減っているということもあると思いますが、設計者と施工者という関係ではなくて、一番誰のためかという施工者のためなのです。施工者が第三者的な設計や監理を本当に求めているのかとも感じます。施工者は適正な価格で、きちんとした建物をつくってくればそれでいいわけです。そのためには設計と施工が分離しようが、設計施工一貫であろうが関係ありません。もちろん設計者と施工者の関係がずぶずぶになるのはまずいですが、必ずこの人だったら良いものをつくってくれるという施工者と組むのは全然悪い話ではなくて、そういう相手を見つけれられる設計者が今後強いのかなと思います。いろいろ話を聞いていると、設計事務所案件でいつもタッグを組む施工者を持っていないところは、そのたびに施工者を見つけて相見積もりを取らなくてはならなくて、結局良いものができないし、苦勞ばかりを重ねてしまう。ちゃ

んとタグを組める相手を早く見つけた方がいいと思います。

建築家の情報発信問題を考える

社会と建築家

関本 今はSNSやインターネットで設計者を検索をして訪ねてくる人が多いです。それを建築家も分かっていますから、皆さんホームページを整理してSNSでも積極的に発信していますが、結局それもみんな同じことをやっているの、建築家の違いがだんだん分からなくなっているような気がします。建築家はどうすればよいのでしょうか。

植久 今建築家のホームページを見ると、コンセプトと作品、あと会社案内が載っていて、だいたいパターンが同じです。似た情報がたくさん出てきますから、何がいいのか分からなくなってしまいます。でもよく見ると行動についてはそう載っていない。発信力は1人より複数の方が強いです。仲間と建物を見に行ったり、街づくりの応援を試みたり、そういうことをしていますということ発信するのがよいのではないのでしょうか。

建築家はもっと街に出た方がいいですよ。街に出た成果を発信してみてください。または、自分の仕事だけではなく、現場技術を分かりやすく集積してみるのはいかがでしょうか。小さな工夫でも集まれば、個性溢れるデータ集があるホームページになるかもしれません。

小原 今僕は特定の雑誌にいるわけではないので俯瞰的に見ているのですが、今一番お金がつく、悪く言えば儲かるのは省エネと木材活用、木造の非住宅です。これらは両方ともブルーオーシャンなんです。先ほどお伝えしたように、きちんとした断熱ができて、デザインセンスがいい住宅はすごく少ないのです。建築家の皆さんはデザインセンスがあるのですから、あとは省エネなどをきちんと考えていく。自分で計算しなくても計算は外に出して、きちんとしたエビデンスを持って、デザインセンスのあるものをつくる。これはすぐにでもできると思います。

それから、木造の非住宅。日本の山は木が肥えすぎていて、どんどん使っていかななくてはならない状態です。そしてそれができるのはゼネコンというよりも、木造住宅の知識がある工務店であり設計事務所。住宅のモジュールをそのまま大きくしていくことで、高いものは難しく

ても横に広いものはつくれますから、住宅の建築家は木造の非住宅に挑戦するのがいいのではないのでしょうか。

木藤 出版社も生き残りが厳しい時代ですが、ひとつ言えることはこれだけSNSやインターネットがある中でも売れる本はあるのです。当社でいうと『住まいの解剖図鑑』が12万部も売れています。この本の著者は増田^{すすむ} 奏さんという建築家ですが、本の中に作品はひとつも載っていません。イラストと文章で、ただただ読んだ人に「建築を楽しく理解してもらおう」ことに終始しています。逆に作風を全面に出して売れた本が、『伊礼智の「小さな家」70のレシピ』や『荻野寿也の「美しい住まいの緑」85のレシピ』です。これも作品ごとによいところを解説するのではなく、家づくりや庭づくりのノウハウを一般的な言葉で語ったことが市場に受け入れられたのだと思います。どんなに能力があっても、それが頭の中で自分の手法として整理され、一般的な言葉で語ることができないと、なかなか伝わりません。逆にそれができている人は、インターネットだろうが、本だろうが、多くの人に支持されていると思います。人が見る・読む理由は、自分の知らない知識や新しい発見、気づきがほしいから。簡単なことではありませんが、自分の視点から離れ、届けたい相手の視点に立って、自分の作品や思想を発信することが求められていると思います。

設計業界の働き方改革を考える

希望ある業界とするために

関本 最後に若者に向けてのトピックで終わりたいと思います。と言いつつ私から暗い話をしてしまいます。先ほど職人の人手不足問題の話がありましたが、同業の建築家の皆さんからもスタッフが集まらない、求人を出しても全然来ないという話をよく聞きます。来ない理由は、ひと言で言うと設計事務所に魅力がないからだと思います。私が非常勤で教えている大学でも、アトリエ設計事務所に就職する人は1割もいません。3~5%くらいではないのでしょうか。大学でもどんどん設計離れが進んでいる。それはやはり設計業界に魅力がないから。なぜ魅力がないかと言うと、労多くして実りが少ない業界だからです。徹夜や休日出勤して、こんなにやっているのになぜこれしかもらえないのか。これでは若い人は来ませんよね。

設計業界に限りませんが、会場に来ている学生さんに、進路を決める時のアドバイスがあれば一言ずついただけますでしょうか。

木藤 建築業界に入ろうと思っただけのためには、やはりいい仕事、いいものをつくって見せていくしかないのではないのでしょうか。建築には出来上がっていくプロセスの面白さがあります。今はバーチャルなもので溢れていますので、建築のような究極のリアルを求める人はいると思いますし、それが最大の魅力です。よいものをつくることの面白さや感動があることを、しぶとく実践し発信し続けることが重要だと思います。

もうひとつは、設計事務所、工務店、大工と分けるのではなく、大工さんが一級建築士資格をもってもいいと思いますし、工務店が設計部をもってもいいし、設計事務所が直接大工さんに発注することもあります。固定概念にとらわれず、新しいことをどんどん始めている若い人もたくさんいますし、好きなことができる余地は十分あると思います。IT長者のようなお金持ちになれる業界ではないけれど、やりがいのある仕事だと思っています。

小原 どうして設計事務所の人が徹夜して仕事をするのか。学生さんが卒計の提出期限が近くなってくるとどうして何泊も研究室に泊まってまでやるのかというと、それは楽しいからなんです。僕も建築学科を出て設計をしていましたが、やはり楽しいのです。その醍醐味は絶対になくならないだろうし、そこにどうやって力とお金を注ぎ込むことができるのかをこれから設計事務所は考えていかなければならないと思います。時間さえかければいいのではなくて、単に労働集約型の設計ではなく、さっき話した省エネ計算や構造計算は自分たちでやらなくていいのです。やってくれるところにちゃんと出す。でも出すからには自分でどういう意思をもって設計をしているかを明確にした上で出す。申請だって自分が頑張っただけでも、これからはAIの時代ですから、BIMで描いていったらBIM申請してAIが建築確認で判断する時代がすぐ来ると思います。だから本来の創造的な仕事以外のことに時間を取られないように、自分しかできないことを自分で考えていく。設計事務所の先輩方はそれができるような素地をつくっていくのがここ2、3年くらいでやらなくてはならないこと。10年後には大きく変わっていると思います。BIMなんてみんな扱えるようになってるし、AIが審査するのも数年後には普通になっているのではないのでしょうか。ですからその時になって大慌てしないように、今から自分たちが楽しめることを必ず確保するような仕事のやり方をさせていただければと思います。

植久 みんな言われてしまいました(笑)。では私の夢をひとつお話しします。

大分県の上津江町のトライ・ウッドという会社が輪掛け乾燥という木材の乾燥方法を実践しています。だいたい樹齢60年以上の木を井桁に組んで、山に風通しのいい場所をつくって、1万本くらい1年間乾燥させています。もちろんそれから山から下ろして製材してまた乾燥させてということをやっているのですが、その事業を支えているのは、ひとつの有力な地域工務店なのです。つまり、ひとつの地域経済をひとつの工務店が頑張れば動かすことができるのです。

何かをしようと思っただけで取り組めば、社会を変えることはできます。これをみなさん覚えておいてください。そんな夢をぜひ見てください。若い人たちは夢を捨てる必要は全然ありません。

構造家の山辺さんは今は木造の大家とされていますが、大工塾を始めた当時は木造はあまり扱ったことがありませんでした。でも大工塾で26、27年経つとあんなに大先生になれるのです。皆さんの10年後20年後はどんな自分にでもなれるのではないのでしょうか。夢を捨てずに走ってください！

関本 ありがとうございます。時間となりましたのでここで終了とさせていただきます。ご登壇の皆さまに今一度大きな拍手をお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

シンポジウムを終えて

秋号、冬号、春号と連続して企画した「住」についての特集がこのシンポジウムをもってひとまず終了となります。多くの人にとって最も身近な建築であろう住まいを、各号さまざまな切り口から複数の方に語っていただき、住宅設計に長く関わる私自身としても、新たな気づきや発見が多々ある充実した企画となりました。ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

今回のシンポジウムは学生の参加も目立ちました。数名の学生からはシンポジウム後にコメントをいただきましたので、この場を借りてご紹介します。将来のJIA、そして建築界を担う人材が出てくることを願って！ (『Bulletin』編集長 長澤徹)

- トークセッションでは、省エネや工務店と建築家の関係性など、興味深い内容が多くて勉強になりました。その後の懇親会でもさまざまな話を聞いて、多くのことが学べました。
- 編集者の方や、実際に建築に携わる方々のお話を聞くことができ、貴重な体験ができました。
- 編集者の視点で建築を考えるということは、普段の講義では得られない貴重な機会でした！協業の話をはじめ、これからの建築業界に求められることがほんの少しだけ分かった気がします。本当に楽しかったです。
- シンポジウムだけに留まらず、懇親会では建築業界で働いている方々を紹介いただき、話を聞くことができました。新鮮で面白かったですし、将来の進路を考えるにあたって貴重な時間になりました！

前々号から3回にわたり、「SDGs」について連載しています。最終回となる今回は、『SDGs建築ガイド日本版』の編集プロセスと事例選定の基準・視点、そして顕在化した課題について岩橋祐之氏に執筆いただきました。

『SDGs建築ガイド日本版』 編集後記と展望



JIA 国際委員会
岩橋祐之

特別委員会の事務局

SDGsが2015年9月の国連サミットで採択され、「持続可能な開発目標」として2030年までに世界が達成すべき17のゴールが掲げられました。それを受けてUIA（国際建築家連合）とデンマーク王立芸術アカデミーとデンマーク建築家協会が協働して、2018年末に『SDGs建築ガイド』を発行しました。そのイントロダクションでも書かれています。「ゴール実現に向けては世界の各地域の気候・文化・取り組みを取り入れた『新しい解決策』が必要」であり、そのためにも各国がそれぞれ「SDGs建築ガイド」を作成することの重要性を認識しなくてはなりません。日本では2019年3月末、六鹿会長が「JIA SDGs建築ガイド日本版 特別委員会」をいち早く立ち上げ、日本版の作成に着手しました。2019年4月にバングラデシュ・ダッカで行われたUIAのSDGs委員会では、岩村委員長がJIAの取り組みを説明し、各国の代表から賛同を得ました。

ダッカの委員会に参加し、一連の経緯を間近に見ながら、『SDGs建築ガイド日本版』作成の事務局を山下博満

氏とともに担当したので、その編集のプロセスと事例選定の基準と視点、その他顕在化した課題をご紹介します。また編集時に「実現できなかった取り組み」と、「今後の展開」についても少し触れさせていただきます。



『SDGs建築ガイド日本版』

事例の収集と絞り込みの過程

最初に、特別委員会の委員とJIA各支部からの推薦で、ゴールごとの課題に貢献していると考えた事例を集めて一覧表にしました。そして5月には全体で250ほどの事例がロングリストとして集まりました。この時点では複数のゴールに該当する事例があり、どのゴールに当てはめるのがふさわしいかを議論しました。どの建物も複数のゴールに当てはまるのは必然で、ゴールと1対1の関係にあるわけではないため、事例としての特徴がより分かり

やすいものを重視して選択しました。さらに、ショートリストを作る際は、所在地・規模・発注者・設計者などが偏らないようにバランスにも配慮しました。選定された建物について委員で分担して文章を作成し、伊藤公文さんに編集補佐を、牧尾晴喜さんに英訳をお願いしました。

SDGsのゴールに対応する選択の基準

国連サミットで採択された17のゴールは建築に限ったものではなく、UIAが作成した『SDGs建築ガイド』で初めて建築という視点に置き換えられた17のゴールが解説され、今回の日本版はこのUIAの解説に従って各事例をゴール別に当てはめました。この過程の事例検証では、事務局側でUIA版の原文をかなり読み込む必要がありました。UIA版の事例は、実際に建っている建物に限定されており、また「取組課題(Challenge)」と「貢献内容(Contribution)」という表現で建物を紹介しているため、日本版も設計者が特定でき、かつ完成している現代の建築物に限定して選択しました。

実は事例収集の過程で、委員から古い建築物も候補事例として多く寄せられたため、それは単純に除外せず、「日本のヴァナキュラーな建築文化」として本章とは別に構成することとしましたが、このヴァナキュラーな建築文化という視点が、「今後のSDGsの展開」に重要な意味を持つという発見がありました。

SDGsのゴールに対応する視点

上記の、各事例をどのゴールに対応するかという作業で浮上した課題は、これまでSDGsのゴールに対応するような視点であまり建築を評価してきていないということでした。したがって、文献や建築雑誌などをもとに優れた点を評価する場合、その評価ポイントが見えにくく、改めて建築の内容を吟味する必要がありました。幸い委員から推薦された事例は「SDGsの視点」で意識的に評価されていなくても、実際には「SDGsの視点」に当てはまる優れた点があり、改めて優れた建築物の普遍的な

価値に気づかされることになりましたが、今後は各種の賞やコンペにおける建築の評価基準も「SDGsの視点」を顕在化させていく必要があるかもしれません。特に古くからある建築の賞では、評価軸を特定せず建築界で共有されてきた価値観をもとにすることが多く、環境系の賞ではエネルギーや自然への影響が主な評価基準となる傾向があります。しかしながら、実は建築にはそれ以外の意義があることを、SDGsの17のゴールは気づかせてくれるように思います。

定性的か定量的か

UIAのSDGs運営委員会でも議論されていますが、SDGsとしては点数化やラベリングは避けようという考え方があります。これはLEED・WELL・CASBEEなど定量的評価に基づく認証制度がすでに普及していることに対して、数値の達成度や量的条件のクリア率で互いに競争するのではなく、数値だけでは測れない、経済・社会・環境にとって重要で本質的な問題を発見し、意味ある建築環境をつくろうという考えからきていると思われまます。これは点数稼ぎのテクニックの罠に陥ったり、特定の産業や企業の利害と結びついたりすることを避けるなど、認証制度への反省もあるのかもしれません。

コレクションではなくガイド

UIAのSDGs運営委員会ですらに議論されている事柄として、建築年鑑や選集など建築作品のコレクションは避けるという、各国の建築家協会が現在行っていることとの重複を避けるべきとの意見もあります。ラベリングとコレクションの2つは、共に競争心理という人間の本能(ある意味での弱点)に通ずる概念で、コレクションもやはりSDGsの精神から逸脱する流れを生む可能性があると考えられます。今回の建築ガイドもその名の通り「ガイド」であり、ゴールの趣旨をより具体例を示して理解しやすくした「バイブル」のような存在であると考えます。今後の第2版、3版が編集されることになる場合は気を付けるべき点だと思われまます。

日本のヴァナキュラーな建築文化

UIA版ガイドブックに対して、日本版を検討する過程で、UIAの事例収集の基準に従い、委員から推薦された日本各地の地域風土に根差したヴァナキュラーな建築、建築家不在のアノニマスな建築、近代以前の歴史的建築を「日本のヴァナキュラーな建築文化」として、本章とは別に構成しました。

(日本のヴァナキュラーな建築文化の例)



大内宿の茅葺屋根



特別史跡旧閑谷学校



嚴島神社



伊根の舟屋

SDGsの視点に立つと、近代化以前の工業化社会を参照することがありますが、世界地図的に見ると、各国の違いはその地勢・気候・風習・産業などから生まれていると考えられます。近代以前から日本の社会に生き続けている有形・無形の「要素」を再発見し、国内のみならず他国に対しても発信することで、UIA版『SDGs建築ガイド』のイントロダクションでも書かれている「ゴール実現に向けては世界の各地域の気候・文化・取り組みを取り入れた『新しい解決策』が必要」ということに対して応えることになると考えます。さらに他国におけるヴァナキュラーな建築文化が、世界共通の「新しい解決策」として日本に対しても応用のできる可能性も秘めています。

今後の展開：ワークショップ

日本のヴァナキュラーな建築文化の文脈から浮かび上がる、SDGsに貢献し得る有形・無形の「建築的要素」を抽出して、今回のガイドブックに17のゴールとは異なる側面の視点を与えようと試みましたが、残念ながら時間切れとなってしまい、「日本のヴァナキュラーな建築文化」として山下博満氏が文章を執筆されました。

現在、ヴァナキュラーな建築文化の提案や、試験的な伝統的要素の抽出作業に協力いただいた東京都市大学福島加津也研究室のOB・現役学生と共に作業を再開し、今後開かれるUIA大会へ向けた展示と発表のためにワークショップを始めました。経済・社会・環境のうち、環境的側面の強い「建築的要素」である、庇・すだれ・縁側・炬燵などは省エネルギーに加え社会的側面もあります。また、屋台・花火・祭りのような社会的要素から、モジュールや規格寸法のような経済や産業と結びついたものまで、多彩な「建築的要素」が現代の建築に生き続けていることを再発見しようと試みています。

東海支部会報誌『ARCHITECT』 発行継続を巡って(後編)

—新方針と改革後の現況—



東海支部
会報委員会 委員長
中澤賢一

前回の掲載では、東海支部会報誌『ARCHITECT』発行見直しまでの経緯と、その対応までをお伝えしました。今回は会員アンケートと会員集会の結果、その後の新方針と改革後の現況をお伝えいたします。

『ARCHITECT』継続・休刊に関する会員アンケート

編集社の編集費用増額に加え、広告協賛金収入と執筆協力者の減少により、発行見直しが決まった2018年6月から、新たな編集社の検討やさまざまな発行形態での試算を行うとともに『ARCHITECT』誌上で、創刊の経緯や意義、現況から見直しに関する検討内容を伝える緊急連載を毎月掲載しました。その内容をふまえて、11月、支部全会員(準会員・法人協力会員含む)と寄贈送付先(130ヵ所)を対象に、『ARCHITECT』継続・休刊に関する会員アンケートを行いました。(設問内容は会員用と寄贈送付先用の2種類を用意。回答期限は11/1～11/15)

回答数は会員数366名中168名で45.90%、法人協会39名、寄贈送付先13ヵ所でした。回答期限まで人海戦術で回答を催促する働きかけをするも、半数に満たない回答数となり、会報誌(あるいはJIA活動?)への関心の低さが露呈する結果となりました。

●会員用アンケートの結果

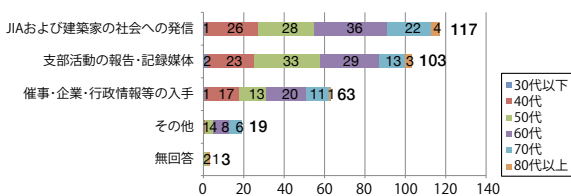
会員への設問では、会報誌に求めるもの(Q4:図1)、編集社の変更(Q5)、広告収入増強の方法(Q6)、今後の発行形態(Q7:図1)、継続の場合の執筆協力(Q8)の5点を問いました。Q4は3割の会員が「社会への発信媒体」、Q5は8割が「変更してもよい」、Q6は7割が「施工会社の広告掲載を可能とする」、Q7は3.5割が「紙媒体で隔月か季刊発行」、Q8は6割が「積極的に協力する」を選択する結果となり、限られた回答数ではあるものの、ひとつの指針が見える結果となりました。また、自由回答欄で会員からは、内容を外向きの情報発信かつ一般の方の興味を惹く内容にすべきとの意見や、広告収入に頼った予算体制を見直し、内容に応じて紙媒体とWeb化を使い分けるべきとの意見が、法人協力会員からは発行に関する費用負担を減らすべきとの意見を多数いただきました。

●寄贈先アンケートの結果

東海4県の行政庁、図書館、建築関連学校などの寄贈先へは、保管状況(Q1)、閲覧人数(Q2)、興味のある記事(Q3)、今後の送付希望(Q4)の4点を問いました。

Q1で半数が全号保管、Q2で閲覧は多くとも20名まで、Q3で外部専門家による連載や保存情報などの地域

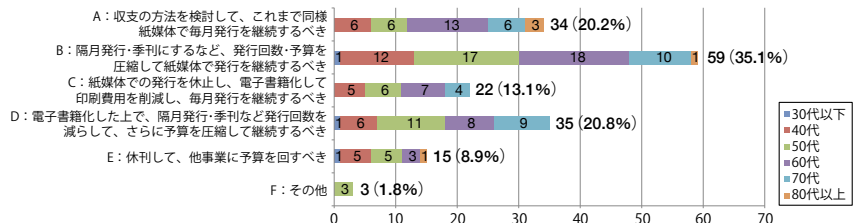
Q4. あなたが会報誌『ARCHITECT』に求めるものは何ですか。(複数回答可)



■ Q4. その他の意見

会員相互の情報交換・交流/執筆訓練、会の議論の場/組織力強化、会員増強/すべてのアーカイブ/お手軽な、気楽な読み物/会員の近況、地域会の情報/会と会員の直接的なつながりのシンボル/会員同士の誌面を通じた交流

Q7. 会報誌『ARCHITECT』の継続について、どうすべきだと思いますか。その理由も教えてください。



■ Q7. アンケート結果より

A・Bは紙媒体の発行が重要との選択で、合わせて全体の55.3%であり、半数以上が紙媒体を希望するという結果。A・Cは毎月発行が重要との選択で、合わせて全体の33.3%。これに対して、B・Dは必ずしも毎月発行である必要はないとの選択で、合わせて全体の55.9%。

E: 休刊選択の理由(会報誌の意義、支部全体の財政見直しに言及する意見多数)。意義を検討し、JIAの方向性も考えながら一度白紙から考え直すべき。本部からの会報誌で十分。対外的発信としての効果がどれほどあるのか疑問であり、内部での情報共有という価値はあると思うが、費用の問題を考慮すると、費用対効果が疑問。その分、他事業や会費をこれ以上高くしないことに意識を回さないことには、会員はますます減少するのでは、と考えるため。

F: その他の意見(A～Dの折衷案の提案)。役割分担をして情報を発信する。建築家の発信はWebと紙媒体、記録や行政情報ほかは電子化して検索しやすくする。

図1 『ARCHITECT』継続・休刊に関する会員アンケート結果

を紹介する記事に興味を持たれていること、Q4で回答すべてが、今後も送付継続希望であることがわかりました。また、自由意見欄では発行を継続する要望を多くいただき、回答数がたった1割であったとはいえ、会報誌発行の意義を感じられる結果となりました。

『ARCHITECT』継続・休刊に関する会員集会

会員アンケートの結果から一定の方針は見出されたものの、一方通行のアンケートの多数決のみで、その行く末は決められません。さまざまな意見を持った会員が集い、お互いに意見を交わすことで得られる結果もひとつの判断材料とすべく、支部全会員を対象に会員集会を開催しました。集会は2019年2月2日(土)14時～16時の2時間で行われ、出席者は366名中42名でした。アンケート回答者からさらに絞り込まれた限られた人数であったものの、会報誌の行く末、支部運営について強い意見を持った会員が集い、大変闊達な議論が交わされました。

はじめに、矢田支部長から新方針の案を収支の試算(従来予算から約100万円の減額)と合わせて提示しました。

1. 発行形態：紙媒体で隔月発行(24頁)にする。
2. 広告収入：法人協力会・会員の広告協賛を廃止し、発行費用を会員数に応じて四地域会で負担(3,000円/人)する。広告協賛を補助的な収入と捉え、対象を新たに施工会社や他業種一般企業まで広げる。
3. 編集印刷会社：より安価な編集費で、編集印刷体制の整った編集社に変更する。
4. 誌面構成：毎号特集を組み、編集委員会だけでなく、特集内容に応じた会員も企画編集に参加し、より読み応えのある誌面を目指す。

これらの新方針は、予算の面で一部の会員と法人協力会に頼り、編集の面で編集委員会に一任したこれまでの状況から、今まで以上に会員全員で会報誌を作っていきたいという支部長の想いで練られた案でした。

これに対し、多くの出席者からは、発行を支えたい会員や企業がまだまだ多くいるはずで、従来通り協賛金を募って予算組みをしてもよいはずとの意見や、同様に法人協力会員からも、増額のない範囲で今後も広告協賛を続けてもよいと考えており、むしろ協力会が広告負担分の効果を得られるよう検討いただきたいとの意見が出ました。

また、会報誌は会費を払うだけのスリープ会員にも平等に届く唯一の会員サービスであり、JIAとのつながり、会の所属を認識できるよう、紙媒体での毎月発行を続ける強い要望が数名から出るなど、発言者各々の背景から来る意見と応答が終了時間まで間断なく続き、閉会しました。

『ARCHITECT』の新方針

会員アンケート・会員集会の結果をもとに、編集委員会・支部役員会でさらに検討を重ね、2019年3月末、いよいよ会報誌の新方針が下記の通りで決定しました。

●『ARCHITECT』の新方針

1. 発行形態	紙媒体での毎月発行を継続し、頁数を16頁から8頁に縮小。ただし、不定期に年数回の特集号を組み、内容に応じて適宜増頁する。
2. 広告協賛金	法人協力会・会員の広告協賛金を従来通り発行費用に宛てる。その上で、施工会社(ゼネコン)を含むさまざまな業種の企業を対象に広告の枠を広げる。
3. 編集印刷会社	編集印刷会社を変更し、編集発行費用を縮減する。
4. 誌面構成	編集委員会メンバーだけでなく、特集内容に沿った有志メンバーとの共同により、不定期に特集号を発行する。

特に発行形態に関して、アンケートの結果と会員集会での支部長提案に反して、毎月発行で決定したことは大きな決断でした。これは会報誌の発行配布が会員サービスの1つであることを第一に考え、これまで通り全会員の手元に月1回のペースで届けることを最優先にした結果です。また、予算体制についても結果としてこれまでと大きな変更はないものの、新たな収入の方法を取り決め、編集社の変更により大幅な支出の縮小を図ることができました。さらに今回の全会員へ向けた約1年間の検討により、これまで以上に会員の意識が会報誌に向いたことは最大の成果であったといえます。

『ARCHITECT』の現況

2019年6月号から新体制での発行が始まり、すでに10号発行されました。新たな編集社の協力により、表紙が2色刷りからカラーになり、誌面デザインも一新され、冊子として見栄えのある仕上がりになりました。また、頁数が半分に縮小されたものの、改革以前に比べて会員の執筆協力が得られるようになり、また熱のこもった記事が多く寄せられるようになりました。さらに、これまで特集号を4号発刊し、さまざまな会員と協力して、より内容の濃い誌面を構成することができました。

今回の改革で、さまざまな負担を縮小できましたが、逆に会報誌に対する会員の高い意識を保ち続けることがより重要になりました。今後も会報誌が全会員へ届く会員サービスであること、外部へ定期的に発信できる有効な媒体である特性を意識しつつ、読み応えのある誌面を目指していきたいと思えます。

ロシア・アヴァンギャルド建築を訪ねて

—ル・コルビュジエ、マエカワ、サカクラのロシア—



篠田義男

昨秋、サンクトペテルブルクとモスクワ両市に現在も残るロシア・アヴァンギャルド建築を訪ねる念願の機会があった。モスクワの中央建築家協会を表敬訪問し、報道担当のダリア女史から見事なネオ・ゴシックの館内を案内していただいた折、踊り場に置かれた同協会のフリーのリーフレットを見つけた。そこには、ロシアの建築家ムハマドハノフ氏が1964年東京で前川國男に会ったことと、福島教育会館、東京文化会館、学習院大学の写真が掲載されていた。

このことから、ロシアの旅はミステリアスになり、前世紀のはじめ、ロシアに起こった新しい建築の波と日本の2人の建築家の関係を紐解くものになっていった。

前世紀初頭、世界は第一次世界大戦の惨禍とロシア十月革命という大きな変革の時代にあった。それに続く時代、建築の世界でも大きな変革の時代が幕を開け、コルビュジエを中心とした新しい建築創造の衝撃がロシアはもちろん、遠い極東の日本にも届いていた。その波に押されるように2人の青年が大学を卒業し、間もなく1人はシベリア鉄道に乗り、もう1人は長い船旅を経て、パリのコルビュジエのもとに渡った。その2人とは前川國男であり、坂倉準三だった。

コルビュジエは変革の震源地ロシアから、ロシア・アヴァンギャルドという先鋭な芸術運動の影響を受けていた。2人の青年はコルビュジエのもとでツェントロソユーズやソヴィエト・パレスなどの設計を通じ、ロシアにつながりを持つことになった。

1929年、パリ

コルビュジエのアトリエに近いセーヴル街のホテルリュッテシヤで、坂倉は前川に初めて逢った。すでにコルビュジエのアトリエで働いていた前川が、師コルビュジエへの面会を坂倉から要望されたのは1929年の秋のことだった、と坂倉の追悼誌『大きな声』に前川は想い出を寄せている。東大美学出身の坂倉は、コルビュジエの勧めもありパリの専門学校で建築を修め、実際に入所が許されたのは1931年になってからであった。アトリエではサヴォア邸、ツェントロソユーズなどのプロジェクトが続いていたが、1920年代の輝ける建築の時代から転換の時期でもあった。

坂倉の初めての担当は、モスクワ川に面した救世主ハリストス大聖堂の跡地に計画された、ソヴィエト・パレスのコンペであった。このコンペは、複雑な経過を辿るが、のちに丹下健三など世界の建築家に強い影響を与えたといわれるロシア構成主義的色彩を強く感じさせる、素晴らしいドローイングをコルビュジエは提出した。

ヨーロッパの辺境であったロシアは、西欧から文化的影響を受け続けていたが、1917年の十月革命を契機に逆に世界を刺激し始め、世界に衝撃を与える。その激動の時代に、マエカワとサカクラはコルビュジエのもとで建築を志すことになったのである。

ソヴィエト・パレスのコンペは革命の成果を世界に問うものであると同時に、ソヴィエト国内のアヴァンギャルドだけにとどまらず、世界の注目を集め、コルビュジエ、グロピウス、ペレなど世界の有力な建築家がこぞって参加した。しかし1924年のレーニンの死を境に、世界革命を目指すトロツキーが排除され、一国社会主義を標榜するスターリンが権力を掌握すると、蜜月が続い

ていたロシア・アヴァンギャルドを囲む状況にも、徐々に逆風が吹き始める。コンペでは、アヴァンギャルドやモダニストの案は無視され、のちに「ス



図2 ソヴィエト・パレスのコルビュジエ案ドローイング(『大きな声—建築家坂倉準三の生涯』より)



図1 モスクワの中央建築家協会のリーフレット。ムハマドハノフ氏は1933年タシケント生まれ、ロシア名建築家。



図3 ツェントロソユーズ(ミヤスニーツカヤ通りファサード)



図4 シューホフ・タワー(1922)



図5 メーリニコフ邸(1929)

ターリン様式」とも呼ばれることになる古典主義的なイオファン案が選定された。アヴァンギャルド建築の敗北の年として1933年は記憶されることになった。

ツェントロソユーズ

1928年に実施されたツェントロソユーズ(旧ソ連消費者協同組合中央同盟)コンペは、ヨーロッパの先進的な建築家が招待されたなか、コルビュジエ案が選定されたが、ニコライ・コリイの協働で1936年によく竣工した作品である。コルビュジエが1920年代に確立したテーゼ「近代建築5原則」に従ったピロティと軽やかなカーテンウォールのコンペ案だったが、モスクワの厳冬期では耐えられないという厳しい批判から、外壁はコーカサス産の厚い凝灰岩へ変更され、ピロティ部分の改変など多くの望まない事態も実施の過程で発生したといわれる。

前川が1928年から1930年、坂倉が1931年から1936年までコルビュジエのもとに在籍し、奇しくもツェントロソユーズのプロジェクト期間に重なり、前川はその担当にもなった。コルビュジエは山積する課題解決の説得に、何度もモスクワに出かけたといわれ、アトリエでの前川、坂倉は、その苦い進行状態やロシア・アヴァンギャルドの事情を貪るようにコルビュジエから吸収したのではないだろうか。今訪れてみると、圧倒的な量塊のメインの立面とは違い、裏のミヤスニーツカヤ通りからは、同時期に進行していたスイス学生会館を思わせる軽やかで自由な立面も見られ、コルビュジエの意味もここにはわずかながら見出すことができる。

ロシア・アヴァンギャルド

ロシアにたびたび出かけたコルビュジエが見た、ロシア・アヴァンギャルドの建築風景はどのようなものだったのだろうか。ヨーロッパを席卷したキュビズム、イタリア未来派などの影響を受けながら、十月革命の2年前の1915年、マレーヴィチの「シュプレマティズム宣言」辺りからアヴァンギャルドの活動は一気に本格化した。1917年のタトリンの第三インターナショナル記念塔計画や1924年のリシツキーの高層ビル案で、ロシア・アヴァンギャルド建築は概念的な新しい姿を世界に提示したと思われる。

実作として、十月革命発祥の街サンクトペテルブルク

には、革命10周年記念のスターチェク広場周辺に、ゴリキー文化宮殿、旧キーロフ・デパート、旧十月革命10周年記念小学校など構成主義建築を配置することで、新しい都市の姿を実現してみせた。モスクワでは、シューホフのラジオ塔(1922)、メーリニコフのゴスプランガレージ(1926)、メーリニコフ自邸(1929)、ルサコフクラブ(1927)、ゴローゾフのズーエフクラブ(1927)、ヴェスニン兄弟のジル工場文化宮殿(1931-1937)と、たて続けにアヴァンギャルドから生まれた構成主義建築の秀作を実現していた。

モスクワ・東京・パリ・弘前

前川は、2年間のコルビュジエのもとでの研鑽を終え、1930年帰国する。翌1931年、右傾化する日本の状況のなかで開催された上野の帝室博物館コンペに、果敢に師譲りのモダニズム案を提出するが、落選する。しかし、パリから日本に帰る船上で素晴らしいクライアントに巡りあい、1932年弘前の地に木村産業研究所という美しい「白い箱」を実現した。

坂倉は長いパリ生活を経て1936年いったん帰国するが、パリ万国博の日本館建設のために再渡仏する。コルビュジエのアトリエを借りながら、驚異的な短期間で日本館の設計をまとめ上げる。日本館に求められていた「日本趣味」に媚びない、師コルビュジエとも異なる透明な空間を持ったパヴィリオンを完成させ、アアルトのフィンランド館、ピカソのゲルニカが出品されたセルトのスペイン館と並んでグランプリを受賞した。日本政府は推薦を辞退したが、オーギュスト・ペレ委員長の裁定でグランプリ受賞が決まった。

さて、ロシア・アヴァンギャルド建築の転換点になったソヴィエト・パレスのコンペ選定案「イオファン案」だが、第2次大戦の突入、根切り工事の出水などで基礎のみ着工されたまま放置され、戦後はモスクワの大屋外市民プールとして利用されていた。しかし、ソ連崩壊後の2000年、大市民プールは跡形も無く撤去され、ソヴィエト・パレス建設に向けて爆破された救世主ハリストス大聖堂は何事も無かったように復元されている。

時代を越えてつながるもの



袴田喜夫

三十代半ばの頃、幸運な縁で目白台の旧細川侯爵邸文化財建築物保存修理の設計監理をすることになった。秋晴れの日に訪れて、青空と豊かな緑を背景に厳しい歴史を物語る外壁と屋根、室内のかび臭さと不思議な意匠に少し戸惑いながらも、言いしれぬ魅力を感じたことを覚えている。

細川^{もりたつ}護立侯は貴族院議員を務め、美術工芸品のコレクションでも名を残す文人である。細川侯爵邸は、明治の旧邸が関東大震災で被害を被り取り壊され、昭和11年に再建されたもので、現在は公益財団法人が所有し東京都文化財に指定されている。建築は昭和7年に設計を大森茂建築事務所に依頼して始まった。昭和9年5月に地鎮祭、11年12月に落成式が行われている。

昭和初期は4年と5年に前田侯爵邸と李王家邸、8年に朝香宮邸と貴族邸宅が竣工している。設計者は高橋貞太郎、宮内省内匠寮、アンリ・ラパンである。11年にこの細川侯爵邸が竣工するが、私には他と少し違って見えた。平面は他の言わば定石の間取りに対して複雑で、一見用途不明の部屋がいくつもあり迷路のように感じられる。内装も和洋中混在のホール、洋風に漆塗の客間、竹造作の洋間寝室、ねじり柱に植物模様壁紙のサロン、アールデコ風の屋根裏部屋と多様である。

設計前の調査で、設計図は昭和7年と9年のものが見つかったがいずれも現状と異なることがわかった。2つの設計の間に、主に外観意匠が簡素になり2階の窓が変更されている。7年案は南側に大きな窓が設けられ、特に侯爵夫妻の寝室は二面連窓の出窓が庭に大きく開いているのに対し、9年案では単窓が主になり壁が増えている。

昭和7年と9年の設計は、護立侯の注文を入れながらも建築家の好みでまとめたのだろう。着工後の変更請書が請負の大林組で見つかり、設計と竣工した建物との本質的な違いは図面が残っていない工事中の変更にあることがわかった。新築工事之内仕上工事請書として躯体工事中の昭和9年12月26日付で請負金額：17万9千8百44円51銭の契約がされている。添付された内訳書の内容は基礎、躯体工事を除く部分で朱の訂正があり、昭和

7年12月の内訳書の仕上工事額と比較すると4万円近い増額であった。この発見までは、設計の変更は経済的な理由と考えていたがそうではない。この内訳書と竣工した建物にはまだ相違があり、前述の特別な内装は全く出ていない。設計図がない、おそらく建築家が関わらなかった部分にこの建物の魅力があると気がついた。

調査中に護立侯の三女の寺島雅子氏にお話を伺うことができた。「父はそこら中に書斎をつくっていましたが、壁には絵がいっぱい掛かっていてね」「初めから侯爵家を継ぐ人じゃなかったのよ。たくさん兄弟がいて、前の家は先代が建てたもので、これは自分が建てたから自分の部屋をいっぱい作ったの」。この話を聞いて納得できた。いくつもある用途不明の部屋は護立侯の部屋だった。窓を小さくしたのは絵を掛けるため、この建物は護立侯の趣味の家だったのだ。前田侯爵邸の前田利為侯爵は生粋の陸軍軍人で、設計者の高橋貞太郎は東京帝国大学を卒業、宮内省内匠寮のエリートである。前田邸がいわば正統派の施主と設計者がつくった迎賓館的な家とすれば、細川邸は護立侯の広範な芸術への関心を具現した極めて私的な家なのである。自ら細かい指図をしてつくり、自身の美意識が濃密にこめられた建築、私には切ったら血の出るような建築に思えた。

足掛け12年の推理小説を紐解くような仕事を終えて、護立公とその時代から日頃の仕事では学べないことを教わったと思った。文化財保存修理では後年の誤解を防ぐためにあえて現代の建材を使い改修する事例が多い。それに違和感を感じ、もし護立公が住み続けていたらどのような改修をするだろうかと思案した。今後の活用のために新たに設けたトイレと独立階段は、その想いで当時と同じ材料を使い意匠を変えて設計した。また半世紀が経った後にどのように受け止めてもらえるか、自分では知り得ないがちょっと楽しみである。



独立階段内観

抱負を語る

JIAに入会して



磯貝俊行

JIAに入会して2年近くが経ちました。もともとJIAの存在はもちろん知っていましたが、敷居が高くて遠慮しており、学校の先輩に誘っていただいたのが入会のきっかけでした。入会した理由は、「設計監理の専門家集団であることから、自己の研鑽や、同じような仲間と交流をさらに広げたい」ということが最も大きかったと思います。

所属する群馬地域会は、皆さん親切で、いろいろな専門的な情報交換もしていただけますし、新しく勉強会なども開いてくださるので、とてもありがたく思っています。今はSNSでいろいろな方と簡単につながることができますが、やはりそれとは違う交流があるように感じています。さらには、まちあるきや地元の建築物を評価することなどを通じて、地域への貢献もできているようで、とても嬉しく思います。そこではやはり、個人でなく団体に活動することの意義を感じます。

実際に活動する人数が多くなく、幹部の方は大変だと思えますが、これからも新しい企画や、今後の建築家としてのありようを考えられるような機会をつくっていただければと、そして私も、少しでもそのお手伝いができればと思います。

最後に私個人の話ですが、私の事務所では戸建住宅の設計監理の業務が多いのですが、1年ほど前からそうした戸建住宅を中心に、「エコハウス・全館空調」を標準仕様にして取り組んでいます。そうしたことでも、地域会の皆さんともより情報交換ができると良いなと思っています。これからも宜しくお願ひ申し上げます。



「高崎の二世帯エコハウス」模型写真

抱負を語る

原点に帰って
建築をはじめ



八板晋太郎

私は大学入学と同時に横浜に移り住み、そのまま横浜で設計事務所に就職して18年間働き、2年前に独立しました。前職では中部、関西、九州、北海道など遠方の現場が多く、場所ごとに違う気候風土や、その中でのものづくりのあり方など、さまざまなことを学ばせていただきました。まだ実作は少ないですが、建築を学んだこの街で建築家として仕事ができることに、大きな喜びと責任を感じています。

独立後最初の作品「森のゲストハウス」は、北アルプスの雪深い別荘地に建つ住宅の「離れ」で、寝室に洗面台とトイレがあるだけという極小の建築です。既存の木を1本も切らない条件から小さな塔状のボリュームとし、屋根と連続した傾斜壁によって、雪を北側に落としつつ、南側からの陽光は最大限取り込むことで四季を通じて森に開くことを考えました。寝室には、移り変わる日の光や葉の色などが、中空ポリカーボネートのカーテンウォールを通して柔らかく浸透しています。

もう1つの作品は自宅の改修ですが、築45年のRC造のメゾネットを、当時の集合住宅が持つシンプルな開放性を活かし、屋上まで縦にもつながる立体的な連続性を残しながら、寝室などを必要最小限に仕切って住居と仕事場を構成しました。

現在は小学校の建替え計画が進行中です。既存校舎を残しつつ増築と解体を繰り返して建替えるため、完成までとても長いプロジェクトですが、念願の地元の仕事ということで多くの方々のご協力を得ながら進めています。

昨年よりJIAに入会し、今後はJIA会員としてさまざまな形で地域に貢献できればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



左：森のゲストハウス（撮影：鈴木研一）、右：山手のメゾネット（撮影：八木夕菜）

残したい地域の風景

—中野区エリアの景観・歴史・環境遺産—

2015年開催の第24回保存問題東京大会時に、東京14地域会の協力のもと「未来へ継承したい環境・景観・建造物・建築物」をテーマにまとめ、大会シンポジウムで各地域会から発表されました。その時の資料をベースに「未来へ継承したい風景」として連載しています。



中野地域会
小西敏正

中野区は文化財に恵まれているとは言えず、緑被率も16.4%で23区中で少ない方に入る。緑のあった住宅地が細分化することで、宅地が緑を育てる余地をなくし、さらに減少している区域が多い。心の中に残しておきたい風景も含めて取り上げてみた。

中野サンプラザ

設計：日建設計 林昌二／昭和48(1973)年

昭和48年に全国勤労青少年会館として竣工。利益が見込める施設であったため民間への譲渡が求められるなど、紆余曲折があった。平成30年、中野区長は「周辺各地区の整備と密接に関連していることを考慮し、施設の再整備に向けて検討を進める」「現在の施設の歴史やブランド、形状などのDNAを引き継ぐ」として建て替える方針を明らかにした。今や、中野のシンボリック的存在になっており、DNAを引き継ぐという意味は抽象的で、何が引き継がれるのかわからないが、未来に継承したくなる中野の風景であってほしい。



中野サンプラザ



サンモールからブロードウェイ入口を見る

サンモールからつながる中野ブロードウェイ

中野駅から早稲田通りまで広い道(ブロードウェイ)を貫くということで始まった計画であるが、早稲田通り出口の買収がうまくいかず現在のよう形になった。一時、営業店の多くが高齢化し閉店が続いたが、サブカルチャーが入り全体に活性化された。駅に続くアーケード(サンモール)、東側の飲み屋街と合わさり中野にしかない雰囲気をつくっている。

白鷺の茅葺き民家とその屋敷林およびその近辺

錆びた波板に保護され、中野区で唯一といえる茅葺の民家が広大な屋敷林に囲まれ残っている。建物は万延年間に移築されたと伝えられている。漬物業を営んでいたが現在は廃業。ぜひとも残したい中野の風物の1つだが、この敷地のしかもこの民家の真上を計画道路が縦断する予定になっている。敷地の東側の道を北に進むと、長屋門を持つ民家や道路に沿って櫛の大木の列が頭上を覆っている。また、ごく近くに前川國男の鷺宮住宅が残っている。



白鷺の茅葺き民家

三岸好太郎・節子のアトリエ

国登録有形文化財

DOCOMOMO選

設計：山脇巖／昭和9(1934)年

三岸好太郎の依頼を受け、バウハウス帰りの山脇巖が設計。残念なことに好太郎は上棟式の日に吐血し、完成を見ずに他界したが、妻の節子によって完成された。鉄骨の螺旋階段を持つ、まさにモダニズム建築を絵に描いたようなアトリエが残っている。東側はフランス帰りの節子の好みも入れた増改築がなされ、節子の画家生活の歴史を映している。イベントに合わせて見学可能。



三岸好太郎・節子のアトリエ

Y邸の土塁

妙正寺川の流域で中野区立第四中学校の北側、かつては大雨のたびに浸水した。このあたりから北に向けて次第に高くなる地形だが、Y邸は土塁をつくり熊笹を植え、その上に垣根を回し、一段高いところを敷地として出水に備えている。庭木も多く、昭和6年竣工の住居はステンドグラスのある玄関を持ち、珍しいスレート波板瓦葺きの趣がある建物である。



Y邸の土塁

童謡発祥の地

上高田3丁目の辺りには、緑のある広い敷地をもった何軒かの住宅が点在する。特に、名主を務め、沢庵の製造もしていた竹垣のS邸(ケヤキ屋敷)の辺りは童謡作家の^{たつみせい}巽聖歌による「たぎび」の歌(昭和16年発表)の舞台として知られている。竹垣の道は今でも素晴らしいたたずまいを見せてくれる。



童謡発祥の地 竹垣のS邸

荒牧医院

杉並の高円寺駅から、駅前商店街を北上し早稲田通りに出た向かい側は中野区。ここに建つ荒牧医院の建物は、大正末から昭和初期にテラーとして建てられ、戦後、荒牧医院となっている。都道の拡張工事に当たり建物前面を斜めに削らざるを得なくなったが、従前の意匠を受け継ぐ形で改修がなされ、この辺りのシンボリックな存在として継続されることになった。



荒牧医院

中野刑務所の門

後藤慶二の設計した旧豊多摩刑務所がこの地にあり、昭和58年に解体されたが、日本建築学会等の要望によって正門だけが保存され法務省の敷地内に残った。法務省の施設が移るにあたり、中野区が小学校建設用地とした敷地内に位置することになり、その保存方法について議論がなされている最中である。受け継がれなければいけない、中野を超えた貴重な日本の歴史の証である。



中野刑務所の門

野方配水塔

国登録有形文化財

昭和5年に建設された配水塔で、国内にいくつか同じような配水塔があり、その形状に特徴がある。中野区における登録有形文化財の第一号であり、現在「みずのとう公園」として整備され、災害時の非常用水源となっている。高台にあるため、遠方からもその存在を目にすることができる。



野方配水塔

哲学堂公園

国指定名勝

哲学館大学を退隠した井上円了が、明治37年に、源頼朝の重臣であった和田義盛の城があった妙正寺川に面した高台を精神的修養公園とすることに決め、ソクラテス、カント、孔子、釈迦を祀った四聖堂をつくったのが始まり。さまざまな哲学的名前を持った建築が点在している。他に例のないユニークな存在である。



哲学堂公園

今回取り上げなかったが、中野区には、未来に継承したい素晴らしい風景がまだまだある。2015年保存問題東京大会のために選んだリストを参考していただければ幸いである。

建築交流部会

長崎軍艦島と熊本城の
復旧見聞の旅建築交流部会
木村 智

建築交流部会の恒例となった建築見聞の旅は、2019年11月7日～9日の3日間、長崎の軍艦島、熊本城の復旧を見聞することを主眼に、12名の参加者で実施しました。「建築を楽しむために、頭や眼、そして脚や胃袋、肝臓までもフルに駆使した」充実した3日間でした。

■台風17号の影響で軍艦島上陸を断念

旅行の直前の9月末、九州全域に被害をもたらした台風17号が長崎海域に猛威を振るい、その影響で軍艦島の埠頭が損壊、当面着船ができないとの事前情報が入りました。すでに旅行予約は進んでいるため、目玉である炭鉱産業遺産の数々を間近に見ることは叶わなくなりましたが、予定通り旅を執行することとしました。

初日の午後、念願の船出です。午前中、軍艦島ミュージアムでデジタルシミュレーションにより疑似上陸体験をして、気持ちも十分高揚してきました。軍艦島が近づいてくると、その姿はまさに100年前のワシントン条約により廃艦の運命を辿った戦艦土佐の姿に似ていると言われ、島名が命名されたそのものの印象でした。

船は棧橋や貯炭場等の生産施設跡がある東側から外洋側の西側に回るルートで進みました。「戦艦の艦橋」に見立てられた丘上の集合住居跡のツタに絡まるRC壁肌が生々しく見てとれました。周囲の高層建物群も明らかに風雨や波による塩害劣化が進んでいて、本格的な補修保存対策が待たれるところです。世界文化遺産に登録された箇所は、明治期の岸壁や生産施設の一部のみで、他の大部分の施設はその対象から外れているとのことで、補修保存にかかわる財源確保の問題や建物の歴史的価値を損なうことなく改修していく方策の難易度も高く、課題が山積している現状を認識せざるを得ませんでした。



軍艦島東側棧橋付近から見た丘上外観



端島小中学校と65号棟共同住宅跡



長崎名物「トルコライス」

面積わずか約6haの島に最盛期は5,300人もの人が暮らしていた事実、それは東京23区の9倍という人口密集社会の実態でした。軍艦島の歴史を振り返ると、1890(明治23)年に三菱が取得、本格的に石炭採掘を始め、1974(昭和49)年に炭鉱閉山後に無人島に帰するまで、わずか100年にも満たない期間でした。端島という浅瀬の小島が3倍にも拡張され、当時の日本の国民生活水準から見れば圧倒的な産業繁栄に支えられた利便性と所得水準で、世界一の高密度海上都市を成立させ、そして瞬間に消滅した様は、歴史の中で近代に光が当たった「泡沫の夢」のような現象であったかもしれません。それ故、後世にその証として引き継ぐ価値は大きいと思います。

夕刻迫る中、帰船上から遠ざかる島の姿は“蜃気楼”のように霞んで小さくなっていきました。

■長崎の美味を食べ尽くす

長崎の食文化は実にユニークです。これは、長崎の人びとが溢れ来る東西の文化を単に受容するだけでなく、工夫を重ね独自に発展させたことによるものでしょう。

初日の昼食は、ちゃんぽん、皿うどん発祥の名店「四海楼」で堪能、夕食は卓袱料理との選択で最後まで迷った末、長崎近海の海の幸で地酒を傾ける結論となりました。選択の中で「敗退した」卓袱料理も中国人伝来の接客料理に和と洋風の味を加えた“和洋中折衷料理”の典型であるし、ちゃんぽんや皿うどんも“和洋中折衷”から生まれた庶民の味として定着したものです。次の日の昼食はトルコライス発祥の店でもあり、九州最古の喫茶店と言われる「ツル茶ん」でくだんのメニューをいただきました。この料理もまた“和洋折衷”の芸術品といえましょう。



「日本二十六聖人記念館」外壁



小浜温泉「春陽館」夕食



「春陽館」の玄関前で参加者一同

■^{たお} 穏やかな色気を醸す長崎の名建築

2日目は参加者の好み志向を尊重し、選定した建築を巡りました。今井兼次設計の「日本二十六聖人記念館」は、現代の建築界が忘れかけた“手触りや材質感”を大切にした名作でした。栗生明設計の「国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館」は、“その建築が果たすべき役割や責任”を深く理解し、誠実に知的に表現され、その手練れ技に感心しました。他にも市内の名建築を見聞しましたが、いずれも長崎の町が背負ってきた自然、文化や産業、社会環境が必然的に映し出された色気に満ちていました。

路面電車(長崎電気軌道)を乗り継ぎ、坂道を徒歩で上り下りしながらの見聞でしたが、年齢の割に皆健脚で、落伍者もなく予定通り全うできたのは、望外でした。

■温泉宿の王道で「湯、景、食、酒」を堪能

2日目の宿は雲仙の西麓にある小浜温泉。長崎から橘湾の海岸線に沿って道はカーブが続き、前後、左右の車窓から顔を覗かせる夕日を追い、快適なドライブで1時間あまり、温泉街に辿り着きました。街の中心に「THE温泉宿」と主張するように、堂々とした存在の唐破風様式の玄関が我々を迎えてくれました。雲仙エリアから湧出する湯は、湯量、熱量とも日本有数とのことで、街のいたるところから白い湯煙が立ち上っている様は圧巻でした。

地元近海魚を中心にアワビや伊勢エビまで盛られた夕食料理に舌鼓を打ちながら、関東では滅多にお目にかかれない雲仙の地酒「東露」や「はねぎ搾り」を大いに楽しみました。橘湾の絶景を望むやや塩分を含むものの癖のない温泉も、旅の疲れを癒すには十分でした。

■熊本城の甚大な被害と想像を超える復旧への道のり

3日目は現在も活発に火山活動を続ける雲仙の山並みを抜けて島原半島を横断、島原港から高速フェリーで

熊本に渡りました。熊本城のお堀端近くの老舗「青柳」で熊本の郷土料理をいただきましたが、時間に追われてゆっくりと味わい楽しめなかったのは心残りでした。

熊本城の復旧工事を担当されている熊本市熊本城事務所技術主幹の古賀丈晴氏に城内をご案内していただくため、城入口の「桜の馬場 城彩苑」で合流しました。2016年の4月14日、16日に熊本市中心部を震度5強、震度6強の地震が続けて襲い、城内の櫓や長塀等13ある重要文化財建造物(倒壊2棟、一部倒壊3棟)や石垣(全体の1割が崩落、3割が要修復)が甚大な被害に見舞われました。しかし、直後に「復旧の基本方針」を、2017年に「復旧基本計画」を策定し、同年より本格的に復旧工事を開始、2019年秋には天守閣エリアに限っての公開が開始され、一般の方々も見られる状況になったようです。

説明の後、「二の丸広場→西大手門→表玄関にあたる頼当御門を経て天守」というメインストリートを進みながら、復旧工事をご案内いただきました。途中、崩落した石垣の実態等を見て、その爪痕の大きさを改めて認識し、工事完成までの道のりの長さを感じました。最後に、古賀氏から復興のシンボルとなる天守閣の完成を急ぎたいとの強い言葉をいただき、熊本城を後にしました。

■自然の力に対するストック整備の折合い

無人化した軍艦島の人工構築物が、その後わずか50年にも満たない間に自然の洗礼により風化が進み、有効な保持対策が進んでない現状、そして熊本城の復旧にも当面まだ20年レベルの期間が必要であろうという現状を思う時、改めて社会ストックに及ぼす巨大な自然の力を意識しないわけにはいきません。今なお噴煙を上げる雲仙普賢岳を望みながら、人間社会が地震、火山噴火、台風等に対して謙虚さをもちながら、どうつくり、どう守っていくのかを考える良い機会の旅となりました。



熊本フェリーから見る雲仙普賢岳(左奥の山)



石垣修復中の熊本城天守閣



石垣修復工事の様子

環境委員会

地域から考えるSDGs



長井淳一
環境委員会
委員長



新井かおり
環境委員会
SDGs WG



横田 順
環境委員会
SDGs WG

環境委員会活動について

委員会の活動と展望について紹介します。今年度よりSDGs WGを発足。昨年に法政大学デザイン工学部建築学科の川久保俊先生にインタビューを実施しました。JIAへの期待、示唆に富んだキーワードをいただき、活動の推進力となっています。建築家は一人一人の命と幸せを守り、住みやすい社会の創造と持続に寄与することが使命です。今、私たちの考えるSDGsとは、建築家として、生活者として、未来への責任を共有することです。WGでは、地域（ローカル）で、身近（パーソナル）なSDGsを考えることから始めています。

第1回として2月に群馬地域会と共催で「地域から考えるSDGs」を開催しました。今後も地域会と連携したキャラバン展開を考えています。（長井淳一）

川久保俊先生へのインタビュー

——さまざまな問題が表面化し複雑に入り組んでいる現在、建築界でもSDGsという共通言語が必要であることを改めて感じています。今後の活動をより充実したものにするため、お話を聞かせてください。

川久保 建築家は日常的にさまざまな制約から統合的な解決を導き出す業務に向き合っていますよね。オーケストラでいえば指揮者的な役割を得意としているので、SDGsにふさわしい職業だと思っています。

——持続可能な社会の実現に向けて取り組みを進めている人もいる一方、取り組み方がわからないという声も聞こえています。どのような姿勢で臨むべきでしょうか。

川久保 SDGsに取り組むためにはストーリーを作ることが有効です。1つの建築もゴールは1つではなく必ずいくつかに派生しています。SDGs言語を使って統合的な解決手法を示せると良いと思います。自社の強みをアピールし、ストーリーで伝えていくことが大切です。SDGsのアイコンで表現することにより、わかりやすく差別化するためのブランディングツールでもあるのです。建築作品でいえば、企業理念や設計思想だったりするものを、どんな世代にもわかりやすく示せるものです。



川久保俊氏（右・法政大学デザイン工学部建築学科准教授）へのインタビュー風景

——社内でもSDGsのプロジェクトが立ち上がりましたが、まだわからないことが多いです。

川久保 SDGsは強制力もないので、取り組まなくてもよいのです。しかし、世界共通の開発目標と日本政府も取組表明をしていますし、今後ますます活性化していくと思います。JIAでもマッピングから始めてHPで公開し、SDGsに関心のあるクライアントを引き込むなど相互利益の関係をつくると良いと思います。登録建築家制度があるように「SDGs認定アーキテクト」のようなものをつくってはどうか。JIA組織としての活動とローカルな活動が同時並行でリンクしていくと良いですね。

——組織や社会のイノベーションを促すことにも使えると聞いたのですが。

川久保 SDGsは組織の中に対しても使えるし、対外的にパートナーを探すツールとしても使えると考えています。例えばJIAにある各委員会の活動をマッピングして、内容を可視化すると個別に見える委員会のつながりが見えてそれぞれがより深みを増したり、イノベーションを起こせるかもしれませんね。本来、社会的な評価というのは多様な価値観から評価されるべきですから、そのような使われ方をしていくと良いと思っています。

SDGsに取り組まれている企業が使う指標としてKPI指標（組織の目標を達成するための重要な業績評価の指標）というのがあるのですが、私はこれを責任追及に使うのではなく目標にしてほしいと考えています。取り組みのレポートが大切だと思っています。私がつくった「ローカルSDGsプラットフォーム」は自治体版ですが、実はビジネス版も開発中で今後いろいろな部門できて

いくと思います。このように建築家向けのものができて、それがクライアントからの選定要件になったり、コンペ要件になったりすると取り組みやすくなりますね。まずは自己目標や指標をつくり自己評価をすることから始めて、これをオープンソースにすることで相互に確認し合うのです。自治体の方では現在年に1度報告する場があり、フォローアップする機会があるのですが、今後さまざまな場面で動き出すと、どのように評価・フォローアップするかが重要になってくると思います。国では定期的な報告会が行われていて、地域や企業にどんどん広がってきています。

気候関連財務情報開示タスクフォース (TCFD) をご存知でしょうか。企業が気候変動のリスク・機会を認識し、経営戦略に織り込み、その成果を報告書にしているのですが、この報告書をESG投融資する機関投資家・金融機関も重視しています。また、環境省は報告書を踏まえた民間の取り組みをサポートしていく姿勢を明らかにしていくため、TCFDに対して正式に賛同の意を表明しています。

—「建築家のためのSDGsガイドライン」も必要ですね。

川久保 ガイドラインを自分たちの手でつくれたら、わかりやすくメッセージとしても強いものがつくれると思います。まず宣言を先に出してしまうのも良いですね。これからますますSDGsの動きが活発になると思うので、ぜひ一緒に広がっていきましょう。

(インタビュアー：横田 順・新井かおり)

SDGs × 建築 × 環境「地域から考えるSDGs」

地域活動の集合体がJIAであることから、地域組織との連携や支援も、環境委員会の大切な活動と考えています。そこで群馬地域会と共に建築・環境の視点で「地域から考えるSDGs」シンポジウムを開催しました。

初めに川久保先生からは“いまなぜSDGsが必要か”という話から、世界や日本政府の動き、私たち建築の分野がどのようにアプローチできるかなど、最新の情報を交えてわかりやすくお話いただきました。環境配慮型建築の必要性、建築物におけるライフサイクルの社会的影響から、「建築関係者はもっと上手くSDGsを使い発信してほしい」と励まされました。今回、地域との連携でSDGsにはローカルやパーソナルな特性があることも会場と共有できました。SDGsを「自分ごと化」して考えることにより自らの強みや弱みを知り、社会貢献と持続可能な発展を同時に達成するツールとして、複雑な現代社会には欠かせないアイテムのように感じました。SDGsを学ぶことにより俯瞰的で長期的な視点が生まれ、



会場風景 臨江閣/国指定重要文化財(前橋市)



左より、講師の川久保氏、コーディネーターの小林氏、パネリストの横堀氏と新井氏

パートナーシップを持って持続可能な社会を形成していくというSDGsの本懐を理解できました。

私たちの学びも建築分野のSDGsもこれからですが、今回の「地域から考えるSDGs」に確実な手応えを感じ、環境委員会では引き続き地域や建築関係者の皆さんと一緒に考え学び合える機会をつくり、持続可能な社会の実現に向けて貢献できればと考えています。(新井かおり)

アウトプットをアピールできる機会を

適切な訳語が無いと言われる「もったいない」精神の中で育った日本人の道徳的感性からすると、多くの方はSDGsを知るにつれ「何だ、特に新しいことは書かれていないじゃないか」という感想を抱くのではないのでしょうか。実際、個人や企業の違いはあれど、日々の活動や取り組みを振り返ればSDGsの17のゴールのどれかに貢献しているものがあることに気付くと思います。

群馬で行われたシンポジウムでの2名の建築家によるプレゼンでもSDGsを未だ知らない、意識していない時期の設計であるものの、しっかりとSDGsに貢献しうる建築であることが確認され、同時に住まい手の快適性や自然との共生がよく考えられた優れた建築作品を生み出す建築家の存在の重要性を改めて認識しました。

今、大手ハウスメーカー等もSDGsへの貢献を掲げており、露出度からすれば消費者に届きやすい状況にあることは間違いありません。どちらが良いということではなくクライアントが選べる環境づくりが重要と考えます。JIAは建築家の集まりとしてSDGsへの貢献を掲げる優れた建築家を世間に知らしめる使命があると思います。環境委員会では、今後そのような建築家のアウトプットをアピールできる機会やプラットフォームづくりに取り組んでいきたいと思っています。(横田 順)

交流委員会

交流委員長 退任の挨拶

チャレンジした4年間



交流委員会委員長
河野剛陽

2016年に交流委員長に就任して早くも4年が経ちました。協力会員の皆様、事務局の皆様にご協力いただきまして、何とか務めることができました。ありがとうございます。この4年間で、目標にしてきたことは、正会員との交流、正会員の活動への協力会員の参加、協力会員の活動の活性化です。達成できなかったことも多々ありますが、いろいろとチャレンジできたと思います。

JIA建築家大会2018東京での協力会員サミットでは、例年とは違う全員参加型の形で盛り上がりました。また支部の広報委員会と連携できたことで、協賛だけではなく大会運営にも少し参加できたことが、正会員との交流という意味では少し前へ進んだかなと感じています。

ホームページのリニューアルも、支部のホームページの移転を機に、より見やすく更新しやすい形式にすることができました。実行できなかったことは、お会いできていない協力会員の方々に交流委員会の良さをPRして参加を促すつもりでしたが、うまく進捗しませんでした。また、協力会員の方々の委員会・地域会の活動への参加を推進しようと目論んでおりましたが、具体的な成果は上がりませんでした。

2019年度で交流委員長は退任いたしますが、今後も、交流委員会の委員としてご協力させていただくつもりです。今後ともよろしく願いいたします。

交流委員長 新任の挨拶

正会員と協力会員の さらなる連携を目指して



交流委員会委員長
相野谷誠志

このたび、2020年度から交流委員長の指名を受けた相野谷です。交流委員長という大変な役目を果たせるかと正直不安な気持ちですが、私のできる精一杯の力で大役を務めますので、よろしくお願いします。

私の仕事は建築設備設計の分野で、建物の機能の一部として、空調設備や給排水設備の設計を行っています。このような私が、JIAの組織の重要な役割を担うことが果たしてできるのかと自問自答していました。

まず私がJIAに参加するきっかけからお話しさせていただきます。私の会社は、すいぶん前からJIAに関わってきました。ある日上司に呼び出され、いきなり「会社の経費でゴルフができるので、俺の代わりにゴルフコンペに行ってくれ」と言われ、どんな会なのかもわからずゴルフコンペに行ったのが、初めてJIAに参加した理由でした。その時の、朝早くゴルフ場に向かう途中で車から見た朝焼けの赤い富士山のことを覚えています。

それから、その上司がまもなく退社し、会社で一級建築士の資格を持っていた私が、後を引き継ぐ形でJIAの交流委員会に参加することになりました。当初は何をすればよいのかもわからず、仕事が忙しい時には会合や行

事等にも参加しないこともありましたが、それでも、何年か委員会に関わっていく中で、他の会員の方たちと交流をさせていただき、会社の中や仕事先での情報とは違う話を聞いているうちに、会合や行事に参加することが楽しみになっていきました。

私の仕事の話に戻りますが、設備設計だけでなく、建築(意匠、構造)設計でも必要だと思いますが、特に設備設計では、空調機器や衛生器具等のメーカーからの情報の入手や協力が不可欠となっています。また、カタログ等の資料から得る情報も大事ですが、電話や来社していただき打ち合わせを行い、人と人との交流が大変大事であると痛感しています。このJIAの交流委員会は、そのような意味でも大変大事な役割があると思います。

今までの委員長の方たちが行ってきた役割を大切に継承しながら、また私ができる何かを見つけ出し、正会員(建築家)とメーカーや工事会社の方たちが一緒に何かに取り組むことから、人と人のつながりができ、お互いの仕事や考え方に良い影響ができるように全力で努めていきますので、よろしくお願いします。

続「きた住まいるヴィレッジ」

JIA 北海道支部による、
行政との協働による地域住宅づくりの取り組み

『Bulletin』2018冬号(273号)に掲載した内容の続報をお届けします。



照井康穂
北海道支部
副支部長

菅沼秀樹
まちづくり委員会
委員長

小倉寛征
まちづくり委員会
副委員長



上：南遊歩道から見たヴィレッジの夕景
左：二期パンフレットに掲載した鳥瞰イメージ図
図中の白黒スケッチが二期7棟のイメージ図。図中①～⑥は一期の6棟。事業者は下記の通り。
①南幌まちなかの家 (アシスト企画×山本亜耕) ②カスタマイズできる家 (晃和住宅×山之内裕一) ③時と共に育つコートハウス (アルティザン建築工房×久保田知明) ④てまひまぐらし (武部建設×櫻井百子) ⑤大きな屋根の小さな家 (キザワ×小倉寛征) ⑥ Inside-Out (アクト工房×大杉崇)

はじめに

「きた住まいるヴィレッジ」は、北海道と南幌町、北海道住宅供給公社、6組の事業者(工務店+建築家)が協働し、南幌町において北海道の気候風土に適した高性能住宅、村づくりに取り組む計画です。JIA北海道支部は2016年より、北海道からの委託を受けて事業計画の作成、コーディネートを継続的に行っています。

きた住まいるヴィレッジの着工

2017年12月より6棟のモデルハウスが順次着工。きた住まいる^{*1}、北方型住宅ECO、長期優良住宅の取得を条件とした高品質の施工管理を行う中、2018年2月に一般の方々を対象とした構造見学会を行いました。工事期間にイベント企画、販売戦略、千鳥配置による空地の外構計画を6事業者間で詰め、雪解け後の整備に向けて準備を進めました。

オープンヴィレッジの開催

モデルハウス5棟が竣工した2018年7月に開村イベントを開催し、3ヵ月にわたるオープンヴィレッジが開始されました。北海道内の木工作家の家具を各住宅に展示するなど北海道のライフスタイルの提案を行いました。

期間中は各事業者の担当者が計画の趣旨や各住宅の特徴を来場者にPR。道外からも多くの建築関係者の方々にお越しいただき、来場者は3,000名を超えました。来場者アンケートでいただいた意見は、その後の販売方法や第二期の事業計画の参考となっております。

また、北海道大学菊田准教授にモデルハウス5棟の温熱環境、空気質についての調査を行っていただき、事業者間で技術成果と課題を共有しました。

モデルハウスの販売

2018年10月からモデルハウスの正式販売を開始。予約制見学会の他、全棟一斉オープンハウスの開催、6社共同ホームページの立ち上げ、住宅や子育てに関連した地域情報雑誌への広告、ラジオCM、フォトコンテストなどの広報活動を展開しました。各棟の詳細はHPを御覧ください。<https://www.replan.ne.jp/articles/5056/>

2018年12月に1棟目の契約が成立、現時点で5棟が売却済みです。特筆すべきは購入された方のすべてが町外からの転入者であること、計画趣旨、建築や町並みに強く惹かれて購入を決定していただいたことです。

今後について

2019年9月、二期計画(7区画)が始まりました。一期のコンセプトを踏襲しつつ建売から売建型に販売方法を変更しました。現在、3区画でオーナーが決定しています。JIAは前回同様の役割を期待され北海道から業務委託を受けています。また、一期5家族の間では暮らしのマナーについて考える茶話会が始まるなど、当初の狙いである「長く、丁寧に暮らす」が実現し始めています。

今後、第三期への拡張に加え、道内他地域での展開を視野に入れ、今回得た知見を資料としてまとめることを北海道と協議しているところです。(文責：小倉)

*1: 安全で良質な家づくりの実現を目指して北海道が定めた事業者登録制度。詳しくは「きた住まいるランド」<http://www.kita-smile.jp>を参照。

わたしの愛用ツール

建設現場やオフィスで、皆さんはどんなツールを使っていますか？
「わたしの愛用ツール」では、皆さんが普段仕事で使っている愛用品やマストアイテム、人に薦めたくなる便利なツールなどを紹介します。
今回は、現場で役立つカメラや温度計、そして場面によって使い分けているペンを紹介していただきました。



Ultracker の360度撮影用カメラ Aleta S2C

山本想太郎



上のような画像を、上下左右に自由に視野を動かしながら見回すことができる。
(筆者撮影サンプルは HP 参照。
atyam.net/vr.html)

台湾、ウルトラカー社製の360度撮影用カメラ。12K(11,520×5,760ピクセル)という圧倒的解像度の精細な画質を特長とし、一般的な360度カメラの「その場の雰囲気を書し取る」という用途にとどまらず、現場調査や竣工記録に十分耐えうる画像、動画を撮ることができる。調査の際には、撮影場所から見えるすべてのものがワンショットに記録されるので、撮り落としということがない。物陰に隠れてスマホのWi-Fiでシャッターを切れば、自身は写らない。

さらに印象深い体験を生み出すのは動画で、空間を移動しながら自由に周囲を見回せるというVR的な動画が簡単に撮影できる。設計のさまざまな局面で、思った以上に活躍してくれるアイテムである。

ただ日本での販売はなく、海外通販サイト等から購入するしかない。国内での同等製品の登場にも期待したい。

(山本想太郎設計アトリエ)

赤外線温度計、赤外線カメラ、 レーザー距離計+α

加藤将己



左から、Turnigyの赤外線温度計、iPhone用の赤外線カメラ「FLIR」、Leicaのレーザー距離計。

日頃重宝しているのはTurnigyの小さい赤外線温度計。83mm、19φのサイズながら、触れることなく赤外線で表面温度が即座に検知されます。最初は床暖房の表面温度の説明のために使い出しました。以前は堀場製作所の赤外線温度計を使っていましたが、正確なれど大きく普段使いには難有りと。こちらはあくまでも目安ですが意外と正確です。

もうひとつは、^{フラワー}FLIRというiPhone用の赤外線カメラです。簡単に画像で表示でき、説明用に効果あります。なによりも簡便でお手頃なのが魅力です。

それから、Leicaのレーザー距離計もよく使っています。天井高の高い部分を垂直に計測、室内ですと遠い面を計測する時に便利です。さすがLeica、正確です。

おまけはお塩です。屋外で蚊に刺された時は、ちょっと水に濡らして刷り込んでやるのです。塩のザラザラ感も心地よく、痒みは即スーと引きます。騙されたと思ってお試しください。

(将建築設計事務所)

3種のペン

下山清之



デジタルツールが普及した今でも、手で書く機会は多くあります。

内ポケットに忍ばせた手帳のお伴は、フリクションの切り替えペン。書いて消せる便利さと、手に持った時の重量感がちょうど良く、使い始めてもう6年経ちます。小さなスペースに書くため芯は0.3を選んでます。

計画時に使うシャープペンは太い芯で書けることに加え、軸の部分にスケールが刻まれている点が気に入っています。生憎一辺だけ縮尺が分からないのですが、それも楽しいものなのでしょう。ノック部分をひねるとペン先がしまわれるため、ポケット内が汚れる心配が無いことも嬉しい点です。

万年筆はメモを取りたい時や、計画時に曖昧になった線を消すする時に使います。インクの太い線は目を引きましますし、力を入れずとも掠れずしっかり書けることが魅力と感じます。

使う所変われば仕様も変わる、3種のペンは私の仕事における大事なツールです。
(横須賀満夫建築設計事務所)

建築系学生のための情報サイト「LUCHTA」^{ル フ タ}と連携しています <https://luchta.jp>

皆さんは建築系学生のための情報サイト「LUCHTA(ルフト)」をご存知でしょうか？

「LUCHTA」を企画運営しているのは、法人協会員企業の(株)建築資料研究社/日建学院です。このサイトは、建築を学ぶ学生たちのさまざまな活動やイベント・コンペティション情報など、学生にとって真に必要な情報をリアルに発信しています。また、学生が建築に関わる楽しさやその意義を感じ、将来に向けての自信と意欲を持ってくれる手助けとなればという思いからスタートしているとのこと。

2020年より、広報委員会は「LUCHTA」と温めてきた企画をスタートさせました。まずはJIAを知ってもらうために、プレゼント企画に参加しました。「LUCHTA」には今月のプレゼントというコーナーがあり、そこにJIA支部関連のプレゼントを提供しています。プレゼントに応募するために、学生はアンケートに答えます。このアンケートの集計結果をもとに、JIAと学生の間を繋ぐさらなる企画を現在模索中です。

また、支部のさまざまなイベント(特に学生向け)を広報が情報提供してLUCHTA側が選定し、サイトで発信することでJIAの活動を学生に知ってもらう機会にもなっています。今後の連携企画もお楽しみに！

(広報委員会 HPWG 主査 中澤克秀)



「LUCHTA」トップページ



プレゼント応募申込みページ。JIA 関東甲信越支部もプレゼントを提供しています。

交流委員会のホームページが改訂されました <https://www.jia-kanto.org/kanto/kouryu/>

このたび、交流委員会のホームページがデザインを一新し、正式公開となりました。

このサイトには、協会員(メーカー、専門工事業者などの方々)のイベント情報や名簿などが掲載されていて、さまざまな分野のスペシャリストである協会員に質問ができる「教えて！協会員」という質問フォームも設けています。正会員と協会員がこのサイトを通じて、より交流を深めていただけることを期待しています。

(交流委員会 広報部会 部会長 深滝准一)

■「交流委員会ホームページ」へは、関東甲信越支部サイトトップページの「メーカー・専門工事業者のご紹介」をクリックしてお進みください。



支部サイトトップページのここをクリック！



交流委員会ホームページトップページ

BACKYARD

退任の挨拶

今後も皆様に
愛読いただけるように

『Bulletin』編集長
長澤 徹



4年ほど『Bulletin』の編集長を務めさせていただきました。
独立後まもなくしてJIAに入会し、その後しばらくして広報委員に誘っていただき、長く広報委員として活動させていただきました。広報委員会は、執筆依頼や編集作業の過程でJIAの全体像や各グループの活動を把握することができ、客観的に組織の全体像を知ることのできる委員会です。自分自身の委員会活動を通じて横のつながりも増え、『Bulletin』の執筆の依頼をきっかけに、普段の仕事のみの生活では出会えない人に会いインタビューできたり、執筆をお願いできたりと貴重な経験を多々させていただきました。

途中、季刊化やHPの充実にもとない、誌面が随分と刷新する分岐点に関わったことで大変なことも多々ありましたが、無事軌道に乗せて次期編集長へバトンタッチできたと思います。これも一重に執筆、取材、編集などで関わっていただいた皆様のご協力のおかげです、本当にありがとうございました。

今さらなのですが、いまだにわからないことがあり、『Bulletin』が「ブルティン」なのか「ブルチン」なのか「ブリテン」なのか、広報委員会の中でも皆呼び方が違い、誰に聞いても正解がわからないまま退任となりました。

ぜひ、この日本語呼び名を固定しない自由な雰囲気継続し、『Bulletin』が今後も皆様に愛読いただけるよう願っています。

(ポーラスターデザイン)

新任の挨拶

『Bulletin』ならではの
特徴ある誌面に

2020年度『Bulletin』編集長
会田友朗



このたび、長澤編集長の後を引き継ぎ、2020年度の『Bulletin』編集長を務めさせていただくことになりました、会田友朗と申します。JIAには2016年の秋、地域会での活動をきっかけに入会、その後、2017年度から支部広報委員を3年あまり務めさせていただいています。多岐にわたるJIAの活動も、主に広報委員会を通して勉強中の若輩者ではありますが、1年間どうぞよろしくお願いいたします。

さて、『Bulletin』は来年度も特集の年間テーマを設定します。2020年度の年間テーマは「拡がる建築家の職能・職域」です。多様化する社会を背景に、建築の専門的な知見に基づきつつも活躍の場を各方面に拡げていくアクティブな建築家像に注目します。加えて、第1弾の夏号では「国・地域・文化を超えて」というサブテーマを設定、建築家ならではの国際的な活動を取り上げる予定です。

『Bulletin』は支部会報誌ではありますが、『JIA MAGAZINE』とは異なる役割を担う、ある種のオルタナティブメディアとしての可能性を感じます。支部HPが整備され諸々の活動報告がインターネット上に移行した今、会員向けのセミクローズな紙メディアという特徴も活かせたらと考えます。ある程度閉じているからこそ書ける、扱える内容もあるかもしれません。せっかくだいた機会を活かし、チャレンジしていけたらと思っておりますので、読者の皆様の忌憚なきご批評、ご意見を賜れば幸いと存じます。

(アイダアトリエ)

支部会報誌『Bulletin』原稿募集

■ わたしの愛用ツール

「わたしの愛用ツール」では、皆様が普段仕事で使っている愛用品やおすすめアイテムを紹介します。長年使っている愛着のあるものや、建築家の仕事に役立つツールなど、文章と写真でご紹介ください。投稿をお待ちしております。

- ① 文字数 300文字程度
- ② 写真や図版1~2点 (JPEG形式)
- ※掲載時期は広報委員会に一任願います。
- ※執筆者の顔写真は掲載しません。

■ ひといき (投稿)

巻末に、長年続けている趣味や関わっている活動のこと、普段考えていることや日常の些細な出来事など、さまざまな話題をコラムでご紹介しています。タイトル通り、気軽な文章大歓迎です。会員の皆様からの投稿をお待ちしております。

- ① タイトル、サブタイトル、見出し、クレジット等部分100文字以内
- ② 本文、400文字以内 (テキスト形式)
- ③ 記事に関する写真を1~2点 (JPEG形式)
- ※なお、執筆者の顔写真は掲載しません。

■ ご意見・ご要望受付、お問い合わせ先

JIA 関東甲信越支部事務局 大西
E-mail : mohnishi@jia.or.jp
TEL : 03-3408-8291
FAX : 03-3408-8294

情報サイト「LUCHTA」のプレゼントコーナーへの
プレゼント提供のお願い

建築系学生のためのサイト「LUCHTA」の「今月のプレゼント」コーナーに、JIA支部関連の制作物などを提供しています。地域会などで作成したマップや小冊子など、このプレゼント企画に提供していただけるものがあれば、広報委員会へご連絡ください。学生やサイトを覗いた一般の方にも手に取ってもらえるチャンスでもあります。提供いただくのは1回につき3部~5部程度です。在庫がある場合など、ぜひ検討してみてください。



プレゼント第1弾として
本や冊子を提供しました

海と空の間で

私は趣味で、45年間海に潜り、15年間空を飛んできました。
 故郷の佐渡の海で、毎年8月14日に佐渡北端の定点を40年間潜って見たものは、海中の変化でした。昔、アワビは殻に長い海藻が生え、夏の直射日光を避けるようでしたが、今は海藻の種類も変わり、岩陰に裸でへばりついています。地元では磯焼けと言っていますが、原因は定かではありません。
 また、魚の住処ですが、石鯛のボスの住処は入り口が小さく、中は大きな空洞になっています。大きな波でも安全に暮らせる場所で、昔から変わることがありません。大きなボスを捕まえると次にひと回り小さなボスがその穴に入ります。
 石鯛はモリで捕まえると鳴き声を出し仲間たちに危険を知らせます。そして、その場所から石鯛の群れはいなくなります。



大型扇風機を背負って空をただよっています

空では、写真にあるようにモーターパラグライダーに乗って遊覧飛行をしています。主に自宅裏の海岸から飛び立ち、波打ち際1メートルから上空1,000メートルを超えるお天気・風任せの飛行です。
 10メートルくらいあるパラシュートとはいえ、空では儂い木の葉のようなものです。一筋の霞のような中へ入っても風や水蒸気で不安定に揺れます。それに命を預けて飛ぶ恐怖と快感は紙一重であることを実感します。飛行高度の違いによる四季

の変化や、人の営みが織りなす風景はさまざまで美しい。
 上空を飛んでいて一番心配なのは、飛行部品の落下です。ビス1つでも凶器になります。これからドローン社会になる上で、一番の問題は、落下と安全の問題だろうと実感します。
 趣味を満喫できるこの地は私にとって最高の楽園です。しかし、80キロ先には柏崎原発があります。時々その上空を飛んでみますが、廃棄物はどこへ行くのか、子どもたちに残す負の遺産が気がかりです。
 (塚本久志)

私の卒業

編集後記

- 自宅を建替し引越生活から卒業、そして『Bulletin』編集長卒業です。ありがとうございました！（長澤）
- 通算して10年続けた大学の非常勤講師もようやく卒業。実務に専念します！（関本）
- 若かりし頃は「青春時代」を歌って卒業を心待ちしていたが、今や建築とJIAは卒業できないと覚悟しています。（中澤）
- いろいろな役から卒業したいところですが、そうもいきません。追われることから卒業し、地に足をつけるように進めていきたいです。（吉田）

- 卒業式の自粛など大変な世の中ですが、新社会人の皆さん頑張れ！という気持ちで自分も心機一転。（会田）
- 体調管理が必要な昨今、平日のお酒から卒業をしました。休日のみ現役で頑張ります。（古谷）
- 広報委員会で1年やってきました、来期もコツコツとできることをやっていきます。（望月）

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
 関東甲信越支部 広報委員会
 委員長 : 市村宏文
 副委員長 : 中澤克秀
 委員 : 長澤 徹・会田友朗・古谷俊一・吉田 満・望月厚司・小林哲也・関本竜太
 編集長 : 長澤 徹
 副編集長 : 会田友朗
 編集ワーキングメンバー : 広報委員+中山 薫・有泉絵美・清水裕子・八田雅章・立石博巳
 編集・制作 : 南風舎

Bulletin 283 2020 春号
 発行日 : 令和2年4月15日
 発行人 : 浅尾 悦子
 発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA 館
 Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
 印刷 : 株式会社 協進印刷
 ■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
 ・ (公社) 日本建築家協会 (JIA) <http://www.jia.or.jp/>
 ・ JIA 関東甲信越支部 <http://www.jia-kanto.org/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2020

出版、資格講座、定期講習、そして建築学生への支援

これからも、
建築家を
応援するために。

私たちは
NPO建築家教育推進機構とともに、
一級・二級建築士のための
建築士定期講習を主催しています。

住宅建築
造景

庭
NIWA

LUONTA

CONFORT

一級建築士／二級建築士／建築設備士／1級建築施工管理技士／
2級建築施工管理技士／1級土木施工管理技士／
2級土木施工管理技士／宅建／土地家屋調査士、等
建築・土木・不動産分野を中心に資格講座を多数開講

株式会社 建築資料研究社 日建学院

☎ 0120-243-229 (日建学院コールセンター)
東京都豊島区池袋 2-50-1 <https://www.ksknet.co.jp>

※本号に掲載の「パートナーズアイ」をぜひご覧下さい。

